

# 日本感情心理学会第 25 回大会

## 大会プログラム



同志社大学 今出川キャンパス（京都市上京区）

2017年6月23日（金）・24日（土）・25日（日）

（6月23日はプレカンファレンス）

## ご挨拶

1992年9月9日、同志社大学今出川キャンパスの同志社礼拝堂で、発会式を行い、翌1993年5月に今は無き京都ホリディンで第1回大会を開催した日本感情心理学会が、このたび第25回大会を迎えることになりました。設立当時にご入会され、現在、日本感情心理学会を支えてくださっている方々は、当時まだ新進気鋭の研究者もしくは大学院生で、新しい知見や技法などをいかに取り入れていけばよいのか、感情心理学という新しい学問分野に対し、好奇心の塊で、積極的な議論を展開されていたものでした。爾来25年、この間に感情心理学を取り巻く環境も大きく変化し、その研究領域、研究方法も大きく広がり、変化してきたように思います。

この度、日本感情心理学会の第25回大会を同志社大学でお世話をする事になりました。会期は2017年6月24日(土)、25日(日)で、会場は記念すべき感情心理学会設立大会を開催した同志社大学今出川キャンパスです。2014年に日本心理学会を開催した場所ですといった方がわかりやすいかもしれません。

今回の大会は学会設立25周年記念大会ですので、テーマは『感情の研究 —これまでの25年、これからの25年—』としたいと思っています。感情心理学会が設立された1992年当時、現在の感情心理学の状況を予想し得た研究者はどれだけいたでしょうか。脳のイメージング技法などをはじめとして、その存在を知るにすぎませんでした。そこで、設立時に30歳、40歳代でご入会いただいた方々に“それぞれの領域を振り返っていただき、25年前に現在の状況を予想し得たのか、どのような点が25年前と変わってきたのか”その光の部分と影の部分も交え語っていただくシンポジウム『四半世紀の感情研究 —その光と影—』を持とうと思います。またもう一つ『感情心理学の基礎と応用を結ぶ』というシンポジウムを企画したいと思います。最近、学位を取り、PDとしてあるいは研究者として活躍を開始されたいわゆる若手の方々にご自身の研究が基礎ならば、今後どのような応用研究へと広がっていくと考えているのかを、ご自身の研究が応用ならば、基礎研究として今後どのような研究が行われることを期待するのかを話していただき、登壇者自身が年代を問わず「この人にコメントをもらってみたい」という人を選んでコメントをいただく、例えば基礎の人が応用のこの人に可能性を聞いてみたい、逆に応用の人が、こうした基礎研究ができないかという可能性を聞いてみたいというようなシンポジウムを考えています。こうした中から新たな感情研究の視点や共同研究が生まれてくれば素晴らしいと思います。

6月下旬の京都はおそらくまだ梅雨も明けておらず、じめじめとした日が続くかもしれませんが、地下鉄の駅から外へ出ることなく会場に入れますので、濡れる心配はありません。また、雨の京都は、多くの歌の歌詞にも取り上げられているように、非常に風情があり、京都のまた新しい魅力を発見できるかもしれません。懇親会は、烏丸通りを挟んだ寒梅館1階の「アマーク・ド・パラディ」で行う予定です。院生もできるだけ多くの方が参加できるように、安価に設定する予定をしています。大会前日23日(金)には、若手研究者の企画によるシンポジウムも予定されています。本大会と合わせて、沢山の会員の方々のご来場をお待ち申し上げます。

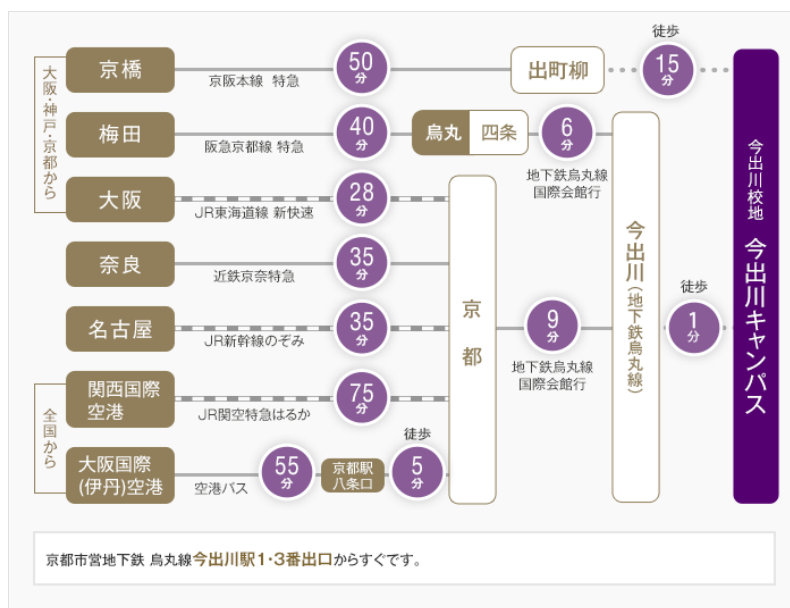
どうぞ京都へ、おこしやす。

2017年5月吉日

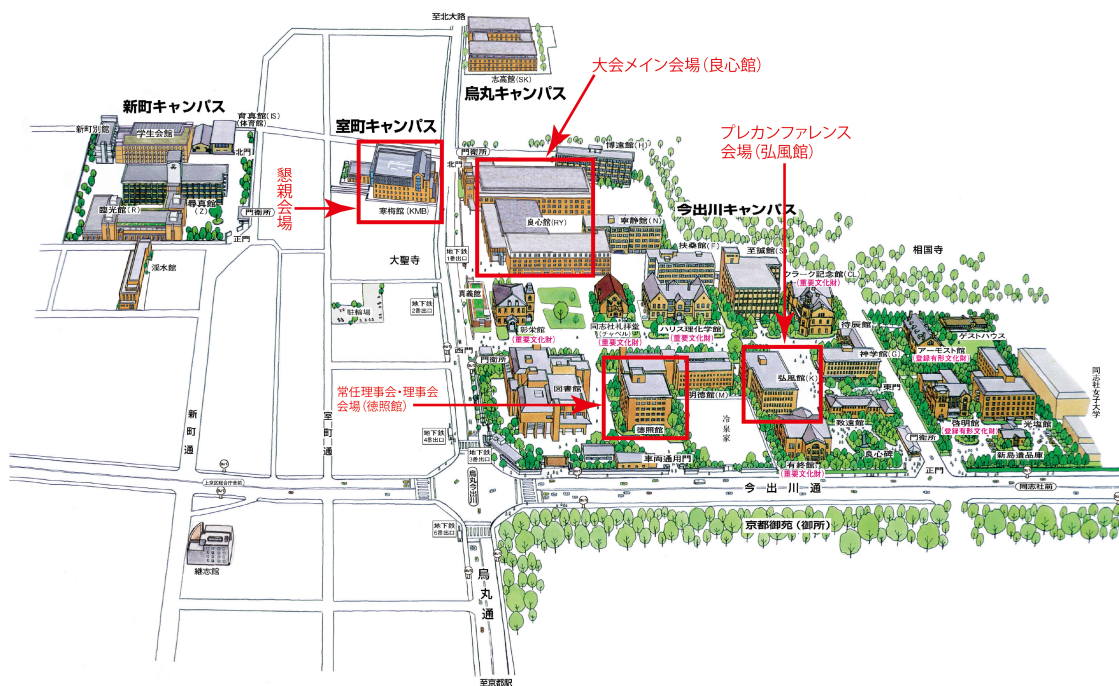
日本感情心理学会第25回年次学術大会準備委員会

準備委員長 鈴木 直人

## 主要駅から同志社大学までのアクセスマップ



## 大会会場周辺地図 (同志社大学 今出川キャンパス)

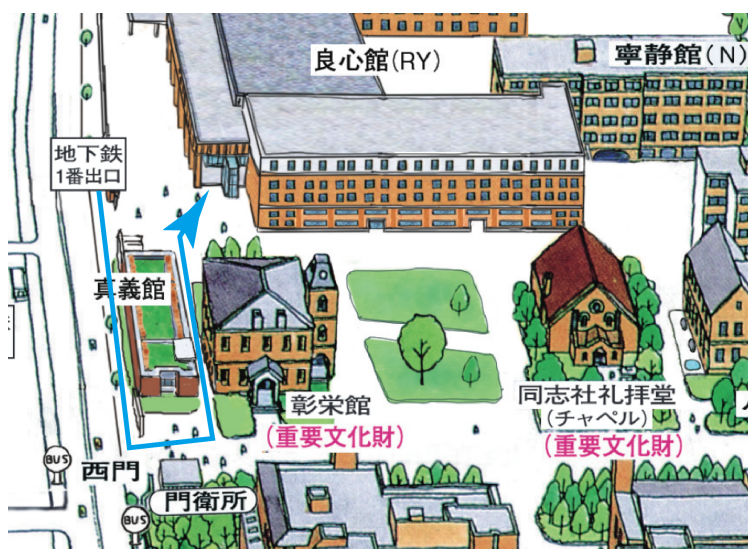
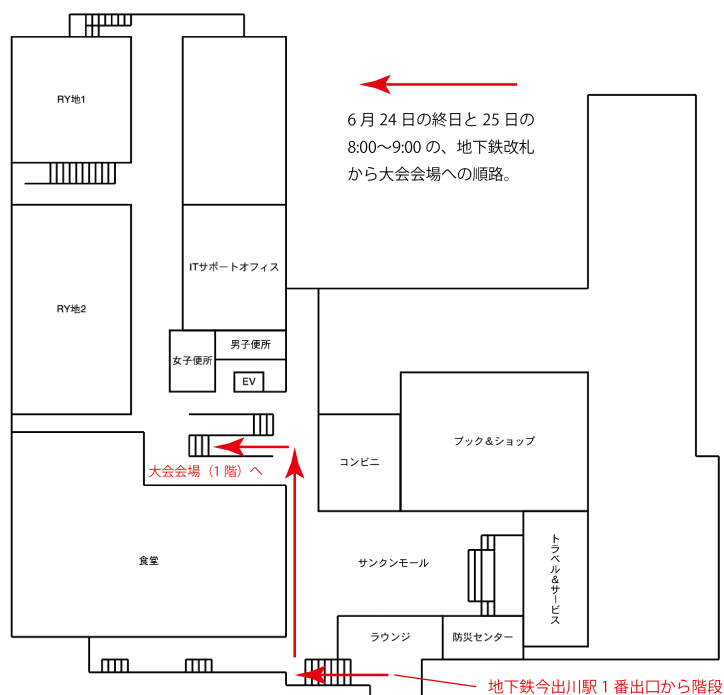


大会会場は良心館 1 階、プレカンファレンス会場は弘風館 4 階、常任理事会・理事会会場は徳照館 1 階です。大会会場から烏丸通を挟んだ向いに寒梅館があり、1 階の「アマーク・ド・パラディ」というレストランが懇親会場です。

## 地下鉄今出川駅から大会会場へのアクセス

大会会場の良心館は、地下鉄今出川駅北改札口 1 番出口から直結されています。1 番出口の専用階段を上っていただく良心館地下 1 階に出ますので(エレベータもございます)、6 月 24 日(土)は下図赤色矢印のとおりお進みください。ただし、6 月 25 日(日)に限り、8~9 時以外の時間帯は改札からの専用階段が閉鎖されますので、1 番出口から一般階段を使って一旦地上に上がり、西門経由で良心館へアクセスしてください(下図青色矢印)。もちろん、両日ともに西門からの地上アクセスはいつでも可能です。ご不便をおかけして恐縮です。

B1F 良心館地下 1 階の見取り図

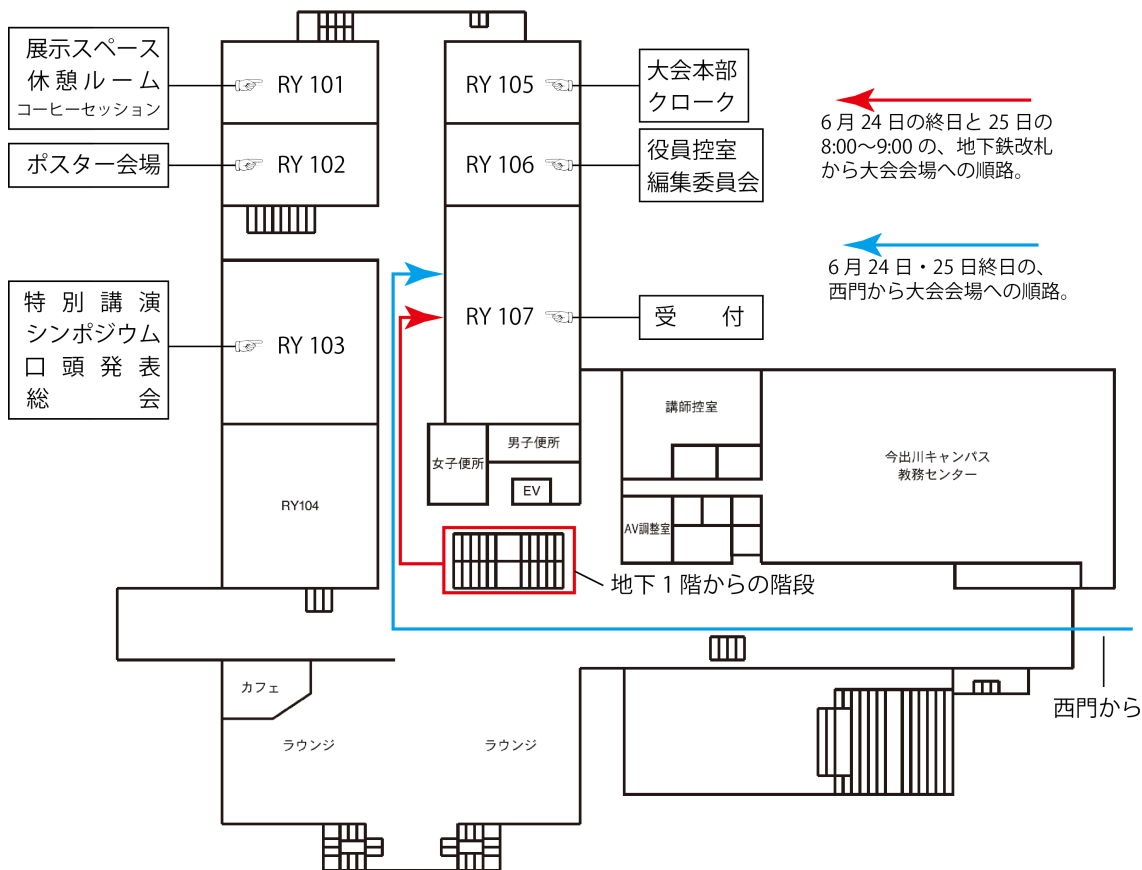




## 大会会場（良心館1階）案内図

1F

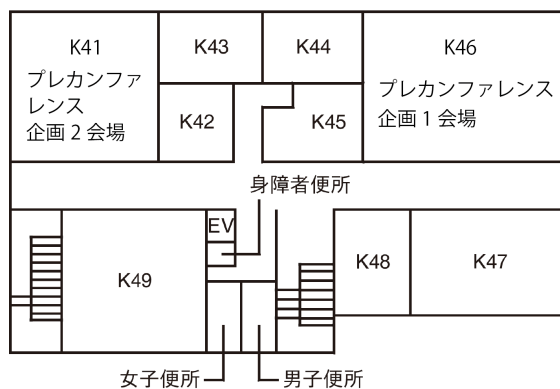
注：教室番号のRYは良心館を表します。



## プレカンファレンス会場（弘風館4階）案内図

4F

注：教室番号のKは弘風館を表します。





## 大会行事等

### 1. 一般研究発表

6月24日(土)、25日(日)の両日にわたり、口頭発表(3セッション)とポスター発表(2セッション)が行なわれます。発表会場は口頭発表が良心館103教室、ポスター発表が良心館102教室です。

### 2. 特別講演

6月24日(土)の15時15分から良心館103教室において、特別講演「音声感情認識・音声病態分析学から人工自我システムまで」が開催されます。

### 3. シンポジウム

2つのシンポジウムが企画されています。6月24日(土)にシンポジウム1「四半世紀の感情研究 ―その光と影―」が、6月25日(日)にシンポジウム2「感情心理学の基礎と応用を結ぶ」が開催されます。いずれも会場は良心館103教室です。

### 4. プレカンファレンス

2つのプレカンファレンス企画が6月23日(金)の17時から開催されます。企画1は「感情心理学研究における客観的評価手法の可能性 ―潜在連合テスト、表情の情動認知、多次元共感性テストを用いた研究の知見とデモンストレーション―」で場所は弘風館46教室、企画2は「今、改めて問う”感情とは何か”」で場所は弘風館41教室です。

### 5. 総会

本年度の総会は6月25日(日)の12時から良心館103教室にて開催されます。

### 6. 各種委員会

- ① 常任理事会・理事会が、6月23日(金)15時～17時の時間帯に開催されます。会場は徳照館1階会議室です。
- ② 編集委員会が、6月24日(土)12時～13時の時間帯に開催されます。会場は良心館106教室です。
- ③ 年次大会引き継ぎ会が、6月24日(土)11時45分～12時30分の時間帯に開催されます。会場は良心館434教室です。この会だけが4階になりますのでご注意ください。

### 7. コーヒーセッション

6月24日(土)、25日(日)いずれも8時30分～9時15分の時間帯に、特に若手会員を対象にして感情心理学研究の編集委員長が直接お茶を飲みながらお話できるセッションを、良心館101教室の休憩室の一角に設けます。フランクなお話しができる機会なので、有効にご活用ください。

### 8. 懇親会

6月24日(土)17時30分～19時30分の時間帯に、大会会場の良心館から烏丸通を挟んだ斜向かいにある寒梅館1階、レストラン「アマーク・ド・パラディ」にて懇親会を開催致します。大会参加者同士の貴重な直接交流の機会を、素晴らしい料理とともに是非お楽しみください。 <http://www.hamac-de-paradis-kanbaikan.jp/>

### 9. 展示

良心館101教室に展示スペースを設けます。休憩室と併用ですので、是非お立ち寄りください。

## 大会参加者へのご案内

### 1. 大会受付

場 所: 同志社大学今出川キャンパス良心館 107 教室

時 間: 6月24日(土)8時30分～16時

6月25日(日)8時30分～16時

### 2. 大会参加費

#### ① 事前予約参加の方

受付に直接お越し下さい。受付でお名前を伺い、予約参加について確認致します。確認後、参加証をお渡し致します。

大会参加費

正会員(一般)	6,000 円
正会員(院生)	5,000 円
学生会員	1,000 円
非会員(学生)	1,500 円
非会員(一般)	7,000 円

懇親会費

一般	5,000 円
院生・学生	3,500 円

#### ② 当日参加(非会員を含む)の方

受付にて下記参加費をお支払いください。

大会参加費(当日参加)

正会員(一般)	7,000 円
正会員(院生)	6,000 円
学生会員	1,500 円
非会員(学生)	2,000 円
非会員(一般)	8,000 円

懇親会費(当日参加)

一般	6,000 円
院生・学生	4,000 円

### 3. クローク

6月24日(土)と25日(日)の大会期間中、良心館 105 教室に設けております(6月23日(金)のプレカンファレンス時は設けられませんのでご注意ください)。ただし、貴重品の管理は各自で責任を持ってお願いします。なお、懇親会中はクロークを閉鎖しますので併せてご注意ください。

### 4. 昼食

会場内には良心館学内食堂があり、会場周辺には飲食店・喫茶店・コンビニエンスストア等がございます。良心館学内食堂の営業時間は、6月23日(金)が8時30分～20時30分、6月24日(土)が10時～18時30分、6月25日(日)は休業です。なお、6月25日(日)は学内食堂および学内コンビニが休業となりますので、ご昼食時には近隣の飲食店をご利用ください。また、同志社大学が発行している地域情報誌「イマ\*イチ」のバックナンバーには会場周辺の飲食店がレビューされています。詳しくは下記 URL にアクセスし、ZIP ファイルをダウンロードの上、解凍してご覧ください。

<https://www.doshisha.ac.jp/attach/page/OFFICIAL-PAGE-JA-1540/79918/file/201611.zip>

## 研究発表者へのご案内

### 1. 口頭発表の方へ

口頭発表は、Windows のノートPC (Windows 8.1 Enterprise)を1台ご用意致します。使用可能なソフトウェアはPowerPoint (Microsoft Office 2016)のみで、インターネット接続はできません。このノートPCを使用される方は、ご発表前に USB メモリ等にデータを入れてご持参ください。その場合、ご用意いただくファイル名は「JSRE2017\_OS01」とし、下2桁の数字部分を各自の発表番号に割り当てられた数字に変更してください。なお、発表会場には HDMI 接続ケーブルが備え付けられており、持参した PC も使用できます。ただし、Mac の場合は正常動作が確約できないため、HDMI 変換ケーブルを持参いただいて自己責任でご使用ください。会場口頭発表1題の持ち時間は15分です。1 鈴:10 分、2 鈴:12 分(発表終了の目安)、3 鈴:15 分(質疑応答を含む発表終了)となります。

### 2. ポスター発表の方へ

掲示用ポスターパネルのサイズは**ヨコ 83cm×タテ 164cm**です。このサイズに収まるようにご作成願います。ポスター貼付用のピンは会場にご用意致します。会場での印刷は致しかねますのでご了承ください。60 分のポスターセッション中、60分間が責任在席時間です。セッション開始後 20～30 分前後の時間帯に会場係が確認に参りますので、ご協力ください。ポスター発表会場は正規の掲示時間にかかわらず、発表当日の 9 時から 17 時まで使用できます。発表ご担当の方は夕方までポスターを掲示し、自由にディスカッションしていただいてもかまいません。なお、17 時 30 分を過ぎても掲示されているポスターは大会準備委員会が撤去・処分致します。悪しからずご了承ください。

### 3. 共通事項

実際の発表に加え、発表抄録を作成いただき期限までに提出いただくことが、発表を公式に記録する要件となります。なお、今大会より、大会 2 週間前(6 月 10 日)までに抄録を提出された発表が次項に示す大会発表賞の選考対象となります。提出期限および詳細は以下の通りですので、締切り厳守でお願い申し上げます。

提出期限

**2017 年 6 月 10 日(土)(大会発表賞選考対象期限)**

**2017 年 7 月 10 日(月)(通常発表最終期限)**

送付先

日本感情心理学会第 25 回大会準備委員会(下記 E メールアドレス)まで、添付ファイルでお送りください。

E メールアドレス jsre2017@mail.doshisha.ac.jp

様式

大会サイト(<http://jsre.wdc-jp.com/conf/2017/submit.html>)からダウンロードしてご使用ください。

### 4. 大会発表賞について

優秀研究賞: 学術的・社会的・教育的意義などの観点から総合的に判断して、本大会の研究発表中、最も優れていると評価する研究発表に対して授賞します。

独創研究賞: 内容・テーマ・方法などに関して、特にアイデアとしての独創性が高いと評価する研究発表に対して授賞します。

グッドプレゼンテーション賞: 主としてポスターやパワーポイントの出来映えを中心に、特に発表の仕方が優れていると評価する研究発表に対して授賞します。

精励発表賞: 主としてポスターやパワーポイントの出来映えを中心に、特に発表の仕方が優れていると評価する研究発表に対して授賞します。なお、精励発表賞は自己申告制となっております。申請方法ならびに申請フォームは大会サイト(<http://jsre.wdc-jp.com/conf/2017/submit.html>)からダウンロードしてご使用ください。



## プレカンファレンス

6月23日(金)17時から弘風館41と46教室にて、主に若手研究者を中心としたプレカンファレンスが開催されます。参加は会員に限定されますが、参加費は無料です。本大会においては、2件の企画が予定されています。

### 企画(1)

テーマ：感情心理学研究における客観的評価手法の可能性 —潜在連合テスト、表情の情動認知、多次元共感性テストを用いた研究の知見とデモンストレーション—

日時：6月23日(金)17時00分～19時30分

場所：弘風館46教室

企画者：	大浦真一（甲南大学）
シンポジスト：	大浦真一（甲南大学） 松尾和弥（甲南大学） 福井義一（甲南大学）
指定討論者：	稲垣（藤井）勉（長崎大学） 大平英樹（名古屋大学）

企画趣旨：近年、心理学では、自記式尺度に頼らない客観的評価手法が開発されており、それらを用いた知見が集積されつつある。これらの客観的評価手法は、開発当初は一般的法則を抽出するために用いられてきたが、臨床心理学において、不適応に影響する個人差要因の検討に応用されることで、さらに有益な知見が得られてきている。感情心理学においても、新たな研究テーマを開拓する可能性を持っていることから、非常に有用かつ有望な手法であると思われる。本シンポジウムでは、感情心理学研究に利用可能な客観的評価手法について、3名のシンポジストから話題提供する。大浦からは潜在連合テスト(IAT)を用いて愛着の潜在的内的作業モデルの測定及び共感性や情動コンピテンスとの関連を検討した研究について、松尾からは共感性や情動コンピテンスの測定に表情の情動認知実験(ERT)を用いることの有用性について、福井からは共感性を実験により測定するMET-CORE日本語版開発の経緯とその利用可能性について話題提供し、それぞれのデモンストレーションも行う。その上で、稲垣(藤井)氏と大平氏から指定討論をいただき、客観的評価手法の可能性についてフロアと議論し、理解を深めていきたい。

## 企画 (2)

テーマ: 今、改めて問う”感情とは何か”

日時: 6月23日(金)17時00分～19時30分

場所: 弘風館 41 教室

企画者: 武藤世良 (お茶の水女子大学)  
白井真理子 (同志社大学)

企画趣旨: 感情とは何か。これは感情心理学者だけでなく、人間にとって永遠の疑問であるだろう。われわれ感情心理学者は、emotion、feeling、affectなどをすべて感情とよび、これらを区別し得る定義の報告はあるものの、明確に区別している人はそう多くない。また、これまで「基本感情」や「自己意識的感情」、「社会的感情」、「道徳的感情」といった様々な感情の上位概念を提案し、その中で一応の操作的定義をし、それぞれの特徴や機能を考察してきた。その一方で、ある感情がどの上位概念に含まれるのかという問題については、研究者間の中で一致しないことが多い。こうした不一致の一因は、無論、研究者それぞれの感情観の違いにあることは明らかであるが、「操作的」概念化そのものが、研究を進めていく上で混乱を招く場合も多い。これからの研究を担っていく若手として、こうした様々な上位概念を含め、“感情”をいかに捉え、どのような視座を持って研究に取り組んでゆくべきか、今一度再考する必要がある。そこで、本シンポジウムでは企画者の発表を基に、「感情とは何か」について改めて考え、議論する場としたい。

# 発表プログラム

注) #印は日本感情心理学会非会員であることを示す

## 特別講演

「音声感情認識・音声病態分析学から人工自我システムまで」

6月24日（土）15時15分～16時45分 良心館103

企画・司会：鈴木直人（同志社大学）

講師：光吉俊二<sup>#</sup>（東京大学大学院医学系研究科）

## シンポジウム

シンポジウム1 「四半世紀の感情研究 — その光と影 —」

6月24日（土）13時00分～15時00分 良心館103

企画・司会：内山伊知郎（同志社大学）・鈴木直人（同志社大学）

話題提供者：中村 真（宇都宮大学）

大平英樹（名古屋大学）

岩永 誠（広島大学）

大坊郁夫（東京未来大学）

シンポジウム2 「感情心理学の基礎と応用を結ぶ」

6月25日（日）13時00分～15時00分 良心館103

企画：興津真理子（同志社大学）・竹原卓真（同志社大学）

司会：白井真理子（同志社大学）

話題提供者：高田琢弘（株式会社ビジネスリサーチラボ）

榊原良太（鹿児島大学）

福田哲也（上智大学）

指定討論者：片平健太郎（名古屋大学）

有光興記（関西学院大学）

今田純雄（広島修道大学）

## 研究発表（口頭発表）

6月24日（土） 口頭発表(1) 10:15～11:45 良心館 103

座長：手塚洋介（大阪体育大学）・木村健太（産業技術総合研究所）

OS01. 怒らせた？ 悲しませた？

被害者の感情についての知覚が加害者の感情や行動におよぼす影響

八木彩乃（高知工科大学総合研究所）

大坪庸介（神戸大学大学院人文学研究科）

OS02. 対人関係ストレスの想起による生理的・脳神経学的変化

—臨床技法を用いた感情操作法の実証的検討—

小澤幸世（東京大学）

OS03. 感情喚起に及ぼす複数のベースライン測定法の比較

手塚洋介（大阪体育大学）

守下つかさ（広島大学大学院）

OS04. 尊敬による「自己ピグマリオン過程」とはいかなるプロセスなのか

—大学生を対象とした短期縦断的検討—

武藤世良（お茶の水女子大学教学 IR・教育開発・学修支援センター）

OS05. 中学生における感情制御の促進要因としての感情への気づきと認知機能

—質問紙と認知課題を用いた検討から—

北原祐理（東京大学）

OS06. 唾液中コルチゾール値は逆転学習における意思決定と関連する

木村健太（産業技術総合研究所自動車ヒューマンファクター研究センター）

井澤修平<sup>#</sup>（労働安全衛生総合研究所）

山田クリス孝介（佐賀大学医学部先進外傷治療学講座）

城月健太郎<sup>#</sup>（武蔵野大学）

6月25日（日） 口頭発表(2) 10:15～11:45 良心館 103

座長：成田健一（関西学院大学）・菅原大地（筑波大学／日本学術振興会）

OS07. 状態2項目自尊感情尺度の再検査信頼性の検討

箕浦有希久（関西学院大学大学院文学研究科）

成田健一（関西学院大学文学部）



- OS08. 道徳感情は連携罰に適しているのか？ 一回想法を用いた外的妥当性の検討—  
 小西直喜（神戸大学大学院人文学研究科）  
 大坪庸介（神戸大学大学院人文学研究科）
- OS09. 不確実性および好奇心が情動持続に与える影響の検討  
 金子迪大（東洋大学大学院）  
 尾崎由佳<sup>#</sup>（東洋大学社会学部）  
 堀毛一也<sup>#</sup>（東洋大学社会学部）
- OS10. 混合感情を表す感情語の検討 ー日本人大学生を対象としてー  
 長峯聖人（筑波大学大学院）  
 菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）
- OS11. 混合感情の文化比較 ー認知的評価理論の観点からー  
 菅原大地（筑波大学/日本学術振興会）  
 Eugene Tee<sup>#</sup>（HELP University）  
 長峯聖人（筑波大学/日本学術振興会）  
 Ramis Tamilselvan<sup>#</sup>（HELP University）  
 宮川裕基<sup>#</sup>（帝塚山大学）  
 杉江 征<sup>#</sup>（筑波大学）
- OS12. 罪悪感と道徳的自己の対応関係の検討 ー潜在連合テストを用いてー  
 古川善也（広島大学大学院教育学研究科）  
 中島健一郎<sup>#</sup>（広島大学教育学研究科）

## 6月25日（日） 口頭発表(3) 15:15～16:45 良心館 103

座長：樋口匡貴（上智大学）・荒川歩（武蔵野美術大学）

- OS13. 感謝特性は災害を生きる力因子を特徴づける  
 本多明生（山梨英和大学）
- OS14. 協同課題における貢献量明確化行動と負債感  
 山本晶友（上智大学大学院）  
 樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）
- OS15. 共感性と表情認知：表情画像の呈示時間による関連性の違い  
 石井辰典（東京成徳大学応用心理学部）
- OS16. 視覚的対象に対するきれいと美的感動の違い  
 荒川 歩（武蔵野美術大学・教養文化研究室）  
 筒井亜湖<sup>#</sup>（武蔵野美術大学）
- OS17. 「鳥肌が立つ」のはどのような感情か  
 片平建史（関西学院大学理工学部）  
 長田典子<sup>#</sup>（関西学院大学理工学部）

- OS18. 妻は夫がキモイのか？ —配偶者に対する接触回避の性差—  
河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）  
羽成隆司（相山女学園大学文化情報学部）  
伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）

## 研究発表（ポスター発表）

6月24日（土） ポスター発表（1） 9:00～10:00 良心館 102

- PS01. MET-CORE 日本語版の作成 —その信頼性と妥当性の検討—(仮)  
福井義一（甲南大学文学部人間科学科）  
大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）  
松尾和弥（甲南大学大学院人文科学研究科）  
藤井 勉（長崎大学大学教育イノベーションセンター）  
島 義弘<sup>#</sup>（鹿児島大学）
- PS02. 社会的事象における共感抑制に影響を及ぼす要因の検討  
北村彩華（就実大学）  
岩佐和典（就実大学）
- PS03. 情動的共感プロセスの予備的検討 —表情刺激の情動体験による違い—  
難波修史（広島大学）
- PS04. 個人の情動特性による感情制御方略の効果の違い —ネガティブ感情の低減・増幅と共感—  
則近千尋（東京大学大学院教育学研究科／教育心理学コース）
- PS05. 意図的な内受容感覚への注意が共感性に及ぼす影響: 質問紙を用いた検討  
小林亮太（広島大学教育学研究科）  
笹岡貴史<sup>#</sup>（広島大学医歯薬保健学研究院精神神経医科学）
- PS06. サイモン課題における目標達成失敗後の反応の変化  
和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）  
芦高勇氣<sup>#</sup>（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）  
上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
- PS07. 悔しさ傾向尺度の開発  
新免愛香（就実大学大学院教育学研究科）

- PS08. 軽蔑感情測定尺度の作成  
 福田哲也（上智大学総合人間科学部）  
 蔵永 瞳（滋賀大学教育学部）
- PS09. 父親に対する娘の嫌悪感  
 阿部洋子（跡見学園女子大学文学部臨床心理学科）
- PS10. 汚染的質感の視覚的検出に影響する画像統計量の検討  
 —行動免疫システムの観点から—  
 岩佐和典（就実大学）  
 小松孝徳<sup>#</sup>（明治大学）
- PS11. 若者の精神的健康の主観的認知  
 隅田すみ子（徳山看護専門学校）  
 岩永 誠（広島大学大学院総合科学研究科）
- PS12. ポジティビティ効果の個人差 —健康長寿研究(SONIC)の結果から—  
 沼田恵太郎（甲南大学人間科学研究所/大阪大学大学院人間科学研究科）  
 堀麻佑子<sup>#</sup>（関西学院大学文学部）  
 中川 威（University of Zurich、Dynamics of Healthy Aging）  
 増井幸恵<sup>#</sup>（東京都健康長寿医療センター）  
 権藤恭之<sup>#</sup>（大阪大学大学院人間科学研究科）  
 Jopp Daniela<sup>#</sup>（University of Lausanne、Institute of Psychology）
- PS13. 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自殺念慮との関連  
 稲垣(藤井)勉（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系）  
 大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）  
 松尾和弥（甲南大学大学院人文科学研究科）  
 島 義弘<sup>#</sup>（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系）  
 福井義一（甲南大学文学部人間科学科）
- PS14. 東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響(8)  
 —地理的距離の違いと熊本地震の効果の検討—  
 木野和代（宮城学院女子大学）  
 大橋智樹<sup>#</sup>（宮城学院女子大学）  
 松浦光和<sup>#</sup>（宮城学院女子大学）
- PS15. 対処行動による良性・悪性妬みの変化  
 浅川萌生（筑波大学大学院人間総合科学研究科(博士前期課程)心理専攻）  
 望月 聡（筑波大学人間系）
- PS16. 児童期における喜び・悲しみ・怒りに関する感情解釈能力の発達段階の推移  
 —小学3年生から6年生に関する検討—  
 本間優子（新潟青陵大学）

- PS17. 乳幼児感情表出写真に対するアレキシサイミア傾向者の表情認知特徴  
—強制選択による感情語布置からの比較検討—  
馬場天信（追手門学院大学心理学部）
- PS18. 高反すう者における効果的なストループ干渉制御  
西村春輝（筑波大学大学院人間総合科学研究科）  
望月 聡（筑波大学人間系）
- PS19. 反すうの思考内容と気分状態の分類  
大井 瞳（筑波大学大学院人間総合科学研究科）  
望月 聡（筑波大学人間系）
- PS20. 職場の人間関係に基づいた若年層のレジリエンス向上策  
戸梶亜紀彦（東洋大学社会学部社会心理学科）
- PS21. 異文化間で汎用できる快適感概念の探索 —日本・米国・タイにおける調査—  
門地(仙波)里絵（花王株式会社感性科学研究所）  
西野真知子<sup>#</sup>（花王株式会社感性科学研究所）
- PS22. 協調的幸福感の文化比較 —コスタリカ・日本・オランダの比較—  
一言英文（福岡大学人文学科）
- PS23. 面子維持行為に関する日中比較 —自己面子と他者面子の2次元をもとに—  
林 萍萍（神戸大学国際文化研究科）  
米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構）
- PS24. 中国人と日本人の感情認知における表情と声の相互干渉性  
—表情刺激の判断難易度を高めた場合の検討—  
曹 蓮（東京学芸大学）  
杉森伸吉<sup>#</sup>（東京学芸大学）  
高 史明<sup>#</sup>（神奈川大学）
- PS25. 虎穴に入らずんば虎子を得ず —欺瞞的ユーモアによる自過失の不利益回避—  
菊地史倫（公益財団法人鉄道総合技術研究所）  
佐藤 拓（いわき明星大学教養学部）
- PS26. ストレスのユーモアコーピングと笑いに対する志向性  
大久保純一郎（帝塚山大学心理学部心理学科）  
西野弓月<sup>#</sup>（帝塚山大学大学院心理科学研究科）
- PS27. 女子大生の大学生活適応感とユーモアスタイル、不安、対人関係の関連  
吉津 潤（関西大学）  
吉田昂平（関西大学大学院社会学研究科社会心理学専攻）  
雨宮俊彦（関西大学社会学部）

- PS28. 「憧れの人」に対する同一視および自己意識的感情と理想自己への志向性との関係  
橋本 巖 (愛媛大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻)  
高岡茉季<sup>#</sup> (株式会社愛媛 CATV)

## 6月25日(日) ポスター発表(2) 9:00~10:00 良心館102

- PS29. あなたの印象は1分で悪化する:既読後の時間経過が印象評価に与える影響  
福島法子 (メディアエンスサービス株式会社)  
石井辰典 (東京成徳大学応用心理学部)  
関谷大輝 (東京成徳大学応用心理学部)
- PS30. LINE コミュニケーションにおける顔文字使用に対人関係が及ぼす影響  
山本恭子 (神戸学院大学人文学部人間心理学科)  
木村昌紀 (神戸女学院大学人間科学部)
- PS31. 人が涙を流すとき —関連感情と気分変化—  
白井真理子 (同志社大学)  
加藤樹里 (金沢工業大学)
- PS32. 人が涙を流すとき(2) —いつ、なぜ「泣きたい」と思い行動するのか—  
加藤樹里 (金沢工業大学心理情報学科)  
白井真理子 (同志社大学研究開発推進機構)
- PS33. 幼児におけるネガティブではない涙の観察エピソードの収集  
—保育士、幼稚園教諭を対象に—  
和田由美子 (九州ルーテル学院大学人文学部)  
井崎美代<sup>#</sup> (九州ルーテル学院大学人文学部)
- PS34. ポジティブな自己一致具体的記憶の想起は気分改善に有効か?  
—抑うつ症状による調整効果—  
松本 昇 (京都大学/日本学術振興会)  
望月 聡 (筑波大学人間系)
- PS35. 情動的な自伝的記憶の想起特性について  
—記憶経験質問紙(Memory Experience Questionnaire)を用いた検討—  
関口理久子 (関西大学社会学部)  
Sutin Angelina R.<sup>#</sup> (Florida State University, College of Medicine)
- PS36. 能力 EI (ability Emotional Intelligence) テストにおける感情選択問題の回答に及ぼす感情感受性の影響  
田中 敏 (信州大学)  
大石 超<sup>#</sup> (長野県屋代高等学校)



- PS37. 二字熟語を用いた情喚起語リストの作成  
 木村年晶（同志社大学研究開発推進機構）  
 鈴木直人（同志社大学心理学部）
- PS38. IATを用いた潜在的衝動性の測定の試み  
 小橋真理子（立正大学大学院心理学研究科心理学専攻）  
 井田政則<sup>#</sup>（立正大学心理学部）
- PS39. 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが抑うつに及ぼす影響  
 —Single-Target Implicit Association Testを用いた検討—  
 大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）  
 松尾和弥（甲南大学大学院人文科学研究科）  
 藤井 勉（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系）  
 島 義弘<sup>#</sup>（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系）  
 福井義一（甲南大学文学部人間科学科）
- PS40. 看護職の感情の制御と省察に関する研究  
 —Cross-sectional study on Emotion Regulation and Reflection of Clinical psychiatric nurses—  
 石井慎一郎（自治医科大学看護学部）  
 板橋直人<sup>#</sup>（日本保健医療大学保健医療学部）  
 路川達阿起<sup>#</sup>（自治医科大学看護学部）  
 佐藤貴紀<sup>#</sup>（自治医科大学看護学部）
- PS41. 感情制御が主観的感情状態に及ぼす影響の経験サンプリング法によるインターネット調査  
 平井 花（学習院大学文学部心理学科）
- PS42. 定位反応誘発状況下の心身反応の推移  
 小川時洋（科学警察研究所法科学第四部情報科学第一研究室）
- PS43. 内受容感覚の鋭敏さを測定する課題に関する検討  
 櫻井優太（愛知淑徳大学心理学部）  
 清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）
- PS44. 悲しみ想起後のフォーカシング技法を用いた音楽聴取がもたらす心理・生理的反応②  
 —教示の有無と歌詞の内容の違いによる検討—  
 栗野理恵子（愛知淑徳大学心理学部）  
 清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）
- PS45. 発表場面における「あがり」—唾液中コルチゾールと感情の変化の検討—  
 慶野友祐（東北大学大学院文学研究科心理学講座）  
 阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）
- PS46. 身体的清潔さ、敏感さ、高揚感と心理的態度との関係  
 —とくにモラルジレンマにおける意思決定に関して—  
 上原智香子（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）

- PS47. 意図した姿勢が対人印象に及ぼす影響  
北村美穂（早稲田大学）  
渡邊克巳<sup>#</sup>（早稲田大学）
- PS48. 意味飽和が感情認識に及ぼす影響  
池田慎之介（東京大学）
- PS49. オノマトペと画像の情報統合に基づいた視覚的嫌悪感の形成  
薛玉テイ（九州大学大学院人間環境学府）  
郷原皓彦<sup>#</sup>（九州大学大学院人間環境学府・日本学術振興会特別研究員）  
佐々木恭志郎（早稲田大学理工学術院・日本学術振興会特別研究員）  
山田祐樹（九州大学基幹教育院）
- PS50. 信頼性学習による顔の見えの変化  
鈴木敦命（名古屋大学情報学研究科）
- PS51. 認知課題を用いたスピーチ不安の低減 —社会不安傾向との関連—  
飯田沙依亜（愛知工業大学）
- PS52. 集合体による不快感 —空間周波数成分と集合体恐怖特性からの検討—  
佐々木恭志郎（早稲田大学理工学術院・九州大学基幹教育院・日本学術振興会特別研究員）  
山田祐樹（九州大学基幹教育院）  
黒木大一郎<sup>#</sup>（九州大学文学部）  
三浦佳世<sup>#</sup>（九州大学大学院人間環境学研究院）
- PS53. トライポフォビアが不快に感じる視覚刺激は本当に不快感情を喚起しているのか  
川口めぐみ（駒澤学園駒沢女子短期大学）
- PS54. 新奇な果実はよく知る果実臭で好物化  
米満文哉（九州大学大学院人間環境学府）  
佐々木恭志郎（早稲田大学基幹理工学部表現工学科・九州大学基幹教育院・日本学術振興会特別研究員（SPD））  
山田祐樹（九州大学基幹教育院）
- PS55. 赤色は名前をも魅力的にするか？  
服部陽介（京都学園大学人文学部）
- PS56. ジェンダー環境によって異性の好みが変わる —女子大学と共学大学の比較—  
中 響子（九州大学大学院人間環境学府）  
米満文哉（九州大学大学院人間環境学府）  
山田祐樹（九州大学基幹教育院）

# 発表要旨

## 特別講演

### 「音声感情認識・音声病態分析学から人工自我システムまで」

6月24日(土) 15:15~16:45 良心館 103

企画者: 鈴木直人 (同志社大学)  
講師: 光吉俊二 (東京大学大学院医学系研究科)

私が最初に音声から「興奮」「怒り・喜び・悲しみ・平穏」を色と強さで定量分析し、可視化させた音声感情認識「ST」を作ってからすでに18年が経ち、現在、東京大学医学部にて、音声から「精神疾患」「神経疾患」「心疾患」「アルツハイマー」までの病態を検知し、分析する技術の研究にまで進みました。その間に、任天堂 DS「ココロキャン」NEC 感情遠隔伝達通信デバイス「言花」、コールセンターシステム、音声病態ではスマホ音声病態分析アプリ「MIMOSYS」、そして最近では Softbank 社から感情コミュニケーションロボット「Pepper」と社会にプロダクトを提供してきました。今回は、感情音声認識から人工知能の自己判断システムとしての「仮想自我」までの医学工学研究の説明をいたします。

#### 講師の略歴

光吉俊二 博士(工学)

1965年 札幌市生まれ

1998年 多摩美術大学美術学部彫刻科 卒業

2006年 徳島大学大学院工学研究科博士後期課程修了 (スタンフォード大学 客員科学者[2003~2004年])

2009~2010年 慶應義塾大学 主席研究員(訪問・2009~2010年)

2009年~2014年 東京大学大学院 工学系研究科非常勤講師

2014年~ 東京大学大学院医学系研究科音声病態分析学 特任講師

■ 彫刻・建築家として JR 羽犬塚駅前彫刻や法務省の赤レンガ庁舎の設計などをしてきたが、独学で CG・コンピュータサイエンス・数学を学び、音声感情認識 ST の原理とアルゴリズム・特許を取得する。その後、工学博士号を取得し、スタンフォード大学・慶應大学・東京大学で研究する。極真館(フルコンタクト空手五段)役員、精武道格闘術(和道古流派柔術空手八段)範士

■ 著書「STがITを超える」日経BP(絶版)、「パートナーロボット資料集成」エヌ・ティー・エス、ウィルフレッド・R・ピオン「グループ・アプローチ」亀田ブックセンター、社団法人 日本機械学会「感覚・感情とロボット」第二部21章 工業調査会、「進化するヒトと機械の音声コミュニケーション」エヌ・ティー・エス

# シンポジウム (1)

## 「四半世紀の感情研究 — その光と影 —」

6月24日(土) 13:00~15:00 良心館 103

企画者: 内山伊知郎 (同志社大学)  
鈴木直人 (同志社大学)  
司会者: 内山伊知郎 (同志社大学)  
話題提供者: 中村 真 (宇都宮大学)  
大平英樹 (名古屋大学)  
岩永 誠 (広島大学)  
大坊郁夫 (東京未来大学)

### 企画趣旨:

感情心理学会は 1992 年に設立されました。学会が設立された当時、Ekman や Plutchik、Frijda、Izard、Campos などが円熟期に達し、Ekman と Russell の論争、Lazarus と Zajonc の論争などが華々しく行われ、Scherer、Oatley、Lang、Buck そして Caccioppo 等々の研究が誌上をにぎわし、感情研究が新しい時代に入ったことを思わせる時代でありました。また、感情心理学の講義を開講している大学は皆無でした。しかしながら、この当時から、感情研究を行っていた研究者で、現在の感情心理学の状況を予想し得た研究者はどれだけいたでしょうか。コンピュータの進歩に伴う新しい感情研究の方法や測定機器解析方法の開発など、当時は考えもしなかったような方法が当たり前のように使われるようになってきました。例えば、脳のイメージング技法はその存在は知ってはいましたが、まだ使いこなすというレベルにはほど遠い状態でした。そこで、設立時に新進気鋭の 30 歳、40 歳代の研究者であり、今や日本の感情研究をリードして下さっているシンポジストの皆さんに『それぞれの領域を振り返っていただき、25 年前に現在の状況を予想し得たのか、どのような点が 25 年前と変わってきたのか、今後はその領域はどうなっていくのか。どのように研究したら、あるいはどのように考えていったらよいのか』などについて、若い研究者に向け大所高所から自由に語っていただこうと考え企画した次第です。この話題提供で、学会員の皆さまの研究テーマに関してアイデアやヒントが与えられれば幸いです。なお、上記のシンポジストの方々以外にも、是非この方に話をさせていただきたいと名前が浮かぶ方も大勢いらっしゃると思います。時間の都合で、上記の方々にさせていただきました。失礼のほどお許しください。

## シンポジウム (2)

### 「感情心理学の基礎と応用を結ぶ」

6月25日(日) 13:00~15:00 良心館 103

企画者: 興津真理子 (同志社大学)  
竹原卓真 (同志社大学)  
司会者: 白井真理子 (同志社大学)  
話題提供者: 高田琢弘 (株式会社ビジネスリサーチラボ)  
榊原良太 (鹿児島大学)  
福田哲也 (上智大学)  
指定討論者: 片平健太郎 (名古屋大学)  
有光興記 (関西学院大学)  
今田純雄 (広島修道大学)

#### 企画趣旨:

学会設立 25 周年記念大会の統一テーマ『感情の研究 ―これまでの 25 年、これからの 25 年―』を踏まえ、このシンポジウムでは研究者として活躍を開始されたばかりの若手の方々にご自身の研究をご紹介いただき、それが基礎ならば、今後どのような応用研究へと広がっていくと考えているのかを、また、ご自身の研究が応用ならば、基礎研究として今後どのような研究が行われることを期待するのかを話していただきます。さらに、登壇者自身が、年代を問わず「この人にコメントをもらってみたい」という人を選んでコメントをお願いできるようにします。例えば基礎の人が応用のこの人に可能性を聞いてみたい、逆に応用の人が、こうした基礎研究ができないかという可能性を聞いてみたいというような研究の発展につながる対話が生まれることを意図しています。これまでの足跡を振り返り新たな展開を望むシンポジウム 1 に加えて、シンポジウム 2 が新たに紡ぎ出される視点がまさに誕生する場となり、こうした中から新たな感情研究の展開や共同研究が生まれることを願っています。

# 一般研究発表 口頭発表 (1)

6月24日(土) 10:15~11:45 良心館 103

## OS01. 怒らせた? 悲しませた?

被害者の感情についての知覚が加害者の感情や行動におよぼす影響

八木彩乃 (高知工科大学総合研究所)

大坪庸介 (神戸大学大学院人文学研究科)

対人葛藤状況における加害者がある際に経験する感情やとる行動は、様々な要因の影響を受けている。その中でも、被害者はこのような感情を経験しているだろうという推測は、加害者の感情や行動にとって重要な至近要因のひとつとなっていることが考えられる。そこで本研究では回想法を用い、実際の出来事で被害者が経験していると思った感情とその程度を回答してもらい、参加者自身の感情や行動との関連について検討した。

## OS02. 対人関係ストレスの想起による生理的・脳神経学的変化

—臨床技法を用いた感情操作法の実証的検討—

小澤幸世 (東京大学)

知覚刺激を用いた感情操作法はボトムアップ処理の感情を誘導するが、日常的には認知処理を伴うトップダウン処理の感情を体験することが多い。本研究では、臨床技法を用いて対人関係ストレスに関わる体験を想起させ、トップダウン処理の不快感情を誘導させた。これにおいて、想起時の感情喚起による生理的、脳神経学的変化を瞳孔計測やfMRI計測によって検討した。

## OS03. 感情喚起に及ぼす複数のベースライン測定法の比較

手塚洋介 (大阪体育大学)

守下つかさ (広島大学大学院)

感情の喚起や持続を検討する際、基準となるベースライン (BL) からの変化が分析対象となる。BL が実験結果に決定的な影響を及ぼすにもかかわらず、どのように BL を測定すべきかについての知見は不十分なままである。そこで本研究では、BL の測定法の違いが感情喚起に異なる影響を及ぼすかについて検討した。ヴァニラベースライン法、リラクゼーション映像視聴および黙読法が、スピーチ課題時の心臓血管系の血行動態に及ぼす影響を調べた。

## OS04. 尊敬による「自己ピグマリオン過程」とはいかなるプロセスなのか

—大学生を対象とした短期縦断的検討—

武藤世良 (お茶の水女子大学 教学 IR・教育開発・学修支援センター)

Li & Fischer (2007) が提唱した、尊敬が追従を動機づけ、ゆくゆくは尊敬した人物のように自己を発達させる過程である「自己ピグマリオン過程」が、具体的にいかなるものであるのかに関して、大学生を対象に約3ヵ月間の短期縦断的調査により検討した。その結果、自己ピグマリオン過程は、敬愛の感情的態度をベースに、心酔や畏怖など、尊敬する人物への様々な感情状態の影響を受け進展する可能性が示唆された。

- OS05. 中学生における感情制御の促進要因としての感情への気づきと認知機能  
—質問紙と認知課題を用いた検討から—  
北原祐理（東京大学）

認知的再評価は、自己の感情体験が変化するように物事に対する考え方を变える、適応的な感情制御である。神経科学領域では、認知的再評価には刺激の意味の内省や再解釈など、複数の脳機能が関与することが示唆されているが、具体的な促進要因を示した研究は少ない。そこで、心理尺度と認知課題を用いて検討を行った結果、感情の言語化能力とワーキングメモリがともに高い群において認知的再評価を行う傾向が高いことが示された。

- OS06. 唾液中コルチゾール値は逆転学習における意思決定と関連する  
木村健太（産業技術総合研究所自動車ヒューマンファクター研究センター）  
井澤修平<sup>#</sup>（労働安全衛生総合研究所）  
山田クリス孝介（佐賀大学医学部先進外傷治療学講座）  
城月健太郎<sup>#</sup>（武蔵野大学）

本研究は、体内のコルチゾール値と逆転学習における意思決定の関連性を明らかにするため、安静期、心理的ストレス負荷期、回復期の唾液中コルチゾール値と逆転学習課題における選択行動の関連性を検討した。その結果、安静期と回復期の唾液中コルチゾール値の高さは、選択行動における報酬/維持率の高さと罰/切替率の低さと関連した。このことは、安静時のコルチゾール値が報酬や罰への感受性と関連する可能性を示す。

## 一般研究発表 口頭発表 (2)

6月25日（日）10:15~11:45 良心館 103

- OS07. 状態2項目自尊感情尺度の再検査信頼性の検討  
箕浦有希久（関西学院大学大学院文学研究科）  
成田健一（関西学院大学文学部）

心理尺度の再検査信頼性は、個人特性の経時的安定性を前提とするため、これまで状態尺度では検証されにくかった。本研究では、通状況的一貫性の一種である首尾一貫性を前提とし、状況が同じであれば、心理状態も同じになると仮定する。この仮定に基づくならば、質問紙実験により被験者に2回同じ状況を経験させ、状態2項目自尊感情尺度の再検査信頼性の検討が可能になる。本研究は学生を対象にその検討を試みるものである。



OS08. 道徳感情は連携罰に適しているのか？ 一回想法を用いた外的妥当性の検討―

小西直喜（神戸大学大学院人文学研究科）

大坪庸介（神戸大学大学院人文学研究科）

大規模な協力維持のための罰行動は集団成員により連携してなされることが近年指摘されている。本研究では、皆が非難するであろうという共有性の期待によって罰の至近要因である道徳感情の強さが変化し、連携した罰が促進する可能性を示した。これまでの研究では、架空の規範違反状況において共有性の期待と道徳感情に相関関係があることが示されていた。本研究では実際に体験した状況においても関係が頑健であるか外的妥当性を検討した。

OS09. 不確実性および好奇心が情動持続に与える影響の検討

金子迪大（東洋大学大学院）

尾崎由佳<sup>#</sup>（東洋大学社会学部）

堀毛一也<sup>#</sup>（東洋大学社会学部）

これまで、不確実性を伴う情動喚起刺激に対しては注意が持続し、そのため情動が持続するという主張がなされてきた。しかしこの結果の再現性は低い。そこで新たに不確実性との関連が指摘され注意を持続させるであろう要因として好奇心の効果を調査で検討したところ、不確実性ではなく好奇心が情動持続を予測し、不確実性は好奇心の高さを予測する場合のみ情動持続を予測することが明らかとなった。

OS10. 混合感情を表す感情語の検討 ―日本人大学生を対象として―

長峯聖人（筑波大学大学院）

菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）

混合感情はポジティブ感情とネガティブ感情が混在したものである。混合感情を表す感情語は例えば英語、ドイツ語、ポルトガル語などに存在しており、実証的な検討が行われているが、本邦においては知見が非常に乏しい。そこで本研究では、どのような感情語が混合感情としての特徴を持つかについて基礎的な検討を行った。その結果、いくつかの感情語において、混合感情と類似した特徴がみられた。

OS11. 混合感情の文化比較 ―認知的評価理論の観点から―

菅原大地（筑波大学/日本学術振興会）

Eugene Tee<sup>#</sup>（HELP University）

長峯聖人（筑波大学/日本学術振興会）

Ramis Tamilselvan<sup>#</sup>（HELP University）

宮川裕基<sup>#</sup>（帝塚山大学）

杉江 征<sup>#</sup>（筑波大学）

混合感情は、快感情と不快感情が同時生起するなど曖昧かつ複雑であり、基本感情説や次元説では説明が難しい。そこで、本研究では多面的に混合感情を捉えるために、認知的評価理論の観点から検討をおこなった。感情体験に文化や言語が与える影響は大きいと、日本とマレーシア在住の大学生・大学院生を対象に質問紙調査をおこない、混合感情の文化比較を試みた。結果からは、両文化における混合感情の認知的評価の差異が示された。

OS12. 罪悪感と道徳的自己の対応関係の検討 ―潜在連合テストを用いて―

古川善也（広島大学大学院教育学研究科）

中島健一郎<sup>#</sup>（広島大学教育学研究科）

道徳的自己は不道徳行動により低下したり、逆に向社会的行動により高まったりと短期的な変動を示す (e.g., Jordan et al., 2015)。このような道徳的自己に影響する行動は罪悪感の生起や緩和とも関係している (e.g., Xu et al., 2014)。それ故、道徳的自己と罪悪感との間には対応関係が想定される。本研究では、道徳的自己と罪悪感との関連について、潜在連合テストを用いた検討を行った。

## 一般研究発表 口頭発表 (3)

6月25日(日) 15:15~16:45 良心館 103

OS13. 感謝特性は災害を生きる力因子を特徴づける

本多明生（山梨英和大学）

Sugiura et al (2015)は、東日本大震災被災者を対象にした質問紙調査から、「リーダーシップ」「問題解決」「愛他性」「頑固さ」「エチケット」「感情制御」「自己超越」「能動的健康」からなる災害を生きる力因子を見出した。本研究は、感謝特性と災害を生きる力因子の結びつきを調べた。その結果、ビッグファイブを制御しても、感謝特性が災害を生きる力因子を特徴づけることが明らかにされた。

OS14. 協同課題における貢献量明確化行動と負債感

山本品友（上智大学大学院）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

相手からの返報を期待し恩恵を施しあう交換的関係では、二人の貢献量の合算で報酬が決まる場面で自身の貢献量を明確にしようとする傾向がある。一方、相手の欲求に応じて恩恵を施しあう共同の関係ではそのような傾向は見られない。本研究ではこの違いを負債感で説明できると考えた。実験参加者に、パートナーが極めて多くの貢献をした続きから課題を行わせ、パートナーと異なる色のペンを使い自身の貢献量を明確にするか検討した。

OS15. 共感性と表情認知: 表情画像の呈示時間による関連性の違い

石井辰典（東京成徳大学応用心理学部）

共感性の定義の1つに自動的・表情模倣を通じた感情共有がある。そこで表情画像が基本7情動のいずれを表すかの判断を大学生に求め、この課題成績と共感性(谷田・山岸、2004)の関連を検討した。GLMMとモデル選択による分析の結果、総じて課題成績は、画像呈示時間が10秒の場合には情動的・認知的共感の双方と正の関連を、0.5秒の場合は認知的共感と負の関連を示した。先行研究との方法の連続性および結果の整合性が議論された。

OS16. 視覚的対象に対するきれいと美的感動の違い

荒川 歩（武蔵野美術大学・教養文化研究室）

筒井亜湖<sup>#</sup>（武蔵野美術大学）

絵画や景色などを見た時に、きれいと感じるときと美的な感動を感じることもある。本研究は、美術大学生 128 人を対象にこの違いを明らかにすることを目的とする。美的感動体験ときれいと感じた体験それぞれに対して、予備調査のインタビューで出てきた項目に、一般的な感動において特徴と言われる項目など 5 段階で回答を求めた。その結果、自失、異世界に放り込まれた、激怒、怒り、考えさせられるなどの項目で差が認められた。

OS17. 「鳥肌が立つ」のはどのような感情か

片平建史（関西学院大学理工学部）

長田典子<sup>#</sup>（関西学院大学理工学部）

鳥肌は感情体験に伴われる身体反応で、強い感情体験に関連した反応である chills の一部として研究されてきた。しかし、chills 研究の主眼は美的文脈にあり、chills の概念も多面的であることから、感情性の鳥肌それ自体についての包括的な知見が不足している。本研究では質問紙調査を実施して鳥肌を喚起する感情の種類を明らかにし、さらに、これらの感情ごとに検討を行うことで、感情性の鳥肌の生起と関連する性格特性を詳細に明らかにした。

OS18. 妻は夫がキモイのか？ —配偶者に対する接触回避の性差—

河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）

羽成隆司（椋山女学園大学文化情報学部）

伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）

配偶者に対する接触回避傾向の性差を検討するため、20 代から 60 代の男女に WEB 調査を実施した。男性の接触回避得点には年代変化が見られなかったが、女性は 20 代のみ男性と差がなく、それ以降の年代で男性よりも有意に高まった。女性の接触回避得点は、自身の年齢および配偶者年齢と有意な正の相関、配偶者との性交渉頻度と有意な負の相関が認められた一方、男性にはこれらの相関は見られなかった。結果をもとに接触回避の機能が考察された。

# 一般研究発表 ポスター発表 (1)

6月24日(土) 9:00~10:00 良心館102

PS01. MET-CORE 日本語版の作成 ―その信頼性と妥当性の検討―(仮)

福井義一 (甲南大学文学部人間科学科)  
大浦真一 (甲南大学大学院人文科学研究科)  
松尾和弥 (甲南大学大学院人文科学研究科)  
藤井 勉 (長崎大学大学教育イノベーションセンター)  
島 義弘<sup>#</sup> (鹿児島大学)

本研究では、共感性を自記式尺度ではなく、実験的に測定する MET-CORE の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。原著者から許可を受け、ドイツ語から英語、日本語へと訳出し、バックトランスレーションを行った。実験協力者は、40枚の画像内の人物の持つ感情を4つから選び、それをどの程度感じるかについても評定した。分析の結果、基準関連妥当性は確認された。ただし、正答率の低い項目について、さらなる検討が必要である。

PS02. 社会的事象における共感抑制に影響を及ぼす要因の検討

北村彩華 (就実大学)  
岩佐和典 (就実大学)

本研究では、通常であれば共感が生じる状況下において共感が生じにくくなる現象を「共感抑制」と名付け、その発生過程について感情喚起映像を用いた実験的手法によって検討した。その結果、ネガティブ感情の共感抑制過程においては、共感喚起過程である役割取得の弱さ、ネガティブな感情反応、並行的感情反応の高さが回避反応に影響していた。一方、ポジティブ感情においては共感抑制が生じにくいことが示唆された。

PS03. 情動的共感プロセスの予備的検討 ―表情刺激の情動体験による違い―

難波修史 (広島大学)

他者が何を感じているのかを直観する情動的共感の処理プロセスは、情動伝染プロセスと直接喚起プロセスの2種類が提案されている。本研究では情動表情刺激の有する実際の体験に着目し、刺激の体験の有無により異なる処理プロセスが生じるかを検討した。その結果、異なる処理プロセスは観察されず、どちらの表情刺激に対しても直接喚起プロセスが支持された。しかし、表情模倣の頻度は体験を有する表情に対してより多く観察された。

PS04. 個人の情動特性による感情制御方略の効果の違い

—ネガティブ感情の低減・増幅と共感—

則近千尋（東京大学大学院教育学研究科／教育心理学コース）

共感には、代理的な苦痛というネガティブな情動が重要である。かわいそうな他者に接しても全く代理的な苦痛を感じない場合も、逆に苦痛を感じ過ぎて「逃げ出したい」場合にも、共感するのは困難である。共感を促すには、個人の情動特性に合わせた感情制御方略の効果を検討する必要がある。本研究では、情動特性(高・低)×感情制御方略(再評価・反すう・統制)の被験者間 2 要因分散分析を行い、これを検討した。

PS05. 意図的な内受容感覚への注意が共感性に及ぼす影響:質問紙を用いた検討

小林亮太（広島大学教育学研究科）

笹岡貴史<sup>#</sup>（広島大学医歯薬保健学研究院精神神経医科学）

内受容感覚が自己の感情だけでなく、他者の感情の理解、共感にも関与することが示されている。しかし、内受容感覚のどのような気づきが共感に影響するかは不明であった。そのため、内受容感覚の気づきを多次的に測定できる MAIA と共感性 (IRI) の関連を検討したところ、内受容感覚への注意傾向と視点取得や共感的関心との間に正の相関が認められた。この結果から、内受容感覚への意図的な注意が共感性を高める可能性について議論する。

PS06. サイモン課題における目標達成失敗後の反応の変化

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

芦高勇氣<sup>#</sup>（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

エラーの連鎖に影響する要因として、目標達成失敗に伴うくやしき情動の効果を検討した。実験では、サイモン課題を実施し、設定された目標に毎回到達しない失敗群と毎回クリアする成功群を設け、パフォーマンスを比較した。その結果、くやしきの誘発には成功したが、ブロックごとのエラー率や反応時間の変化については、群による違いは見られなかった。

PS07. 悔しさ傾向尺度の開発

新免愛香（就実大学大学院教育学研究科）

本研究では、悔しさの構成概念について検討するとともに、悔しさを測定するための質問紙尺度を開発した。まず、自由記述による調査から、怒りと失望が悔しさの中核的な構成要素であることが示された。この結果を元に、悔しさの感じやすさを測定するための悔しさ傾向尺度を作成した。悔しさ傾向尺度は 28 項目 4 因子構造を成しており、内的整合性と構成概念妥当性についても一定の支持が得られた。

PS08. 軽蔑感情測定尺度の作成

福田哲也（上智大学総合人間科学部）

蔵永 瞳（滋賀大学教育学部）

本研究は軽蔑感情測定尺度の作成を目的とした。類語辞典から収集・整理した軽蔑の類語 150 語から、日常的に使われ、感情を表す語を抜粋し、項目を作成した。調査対象者には軽蔑感情を感じた経験を想起させ、“軽蔑”項目を含む計 9 項目を感じた程度を尋ねた。その結果、5 項目が“軽蔑”項目と中程度以上の有意な相関を示し、“軽蔑”項目を加えた計 6 項目の  $\alpha$  係数が十分な値を示したことから、この 6 項目を軽蔑感情測定尺度とした。

PS09. 父親に対する娘の嫌悪感

阿部洋子（跡見学園女子大学文学部臨床心理学科）

父親に対する娘の嫌悪感と、感情表出語ならびに会話の質と量について検討した。父親を感じさせる会話は、関係性を良好なものに、娘を女性としてみる会話は関係性を悪化させる。前者のような父親に対して娘は悩み事を相談するが、後者のような父親に対して娘は悩み事相談もしないことが見出された。感情表出語としては、汚い・臭いは、関係性が悪化しなければ表出されないことも見出された。

PS10. 汚染の質感の視覚的検出に影響する画像統計量の検討

—行動免疫システムの観点から—

岩佐和典（就実大学）

小松孝徳<sup>#</sup>（明治大学）

行動免疫システムは、環境内の汚染源を検出し、嫌悪感と回避行動を誘発することによって、疾病や感染症を防ぐ機能を有する。本研究では、しばしば雑菌繁殖等の汚染の性質を帯びる、物体表面の「湿り気」に着目し、視覚的検出に影響する画像統計量を検討した。光学パラメータを操作した 3D 画像を刺激とした一対比較実験の結果 ( $n = 20$ )、湿り気の感性評価値は、輝度ヒストグラムの歪度によって説明可能であることが示された。

PS11. 若者の精神的健康の主観的認知

隅田すみ子（徳山看護専門学校）

岩永 誠（広島大学大学院総合科学研究科）

WHO 憲章(1948)の健康の定義は「身体的に健康というだけでなく、精神的にもスピリチュアルにも良好な状態である」とされている。現代人は、精神的に健康な状態をどのように捉えているのか。若者が精神的健康をどのように認知しているかについて調査を行った。専門学校生 228 名に「自分にとって精神的に健康な状態はどのようなものか」と教示し自由記述で回答してもらった。記述された内容から項目を抽出し内容分析を行った。

PS12. ポジティブイティ効果の個人差 —健康長寿研究(SONIC)の結果から—

沼田恵太郎 (甲南大学人間科学研究所/大阪大学大学院人間科学研究科)  
堀麻佑子<sup>#</sup> (関西学院大学文学部)  
中川 威 (University of Zurich、Dynamics of Healthy Aging)  
増井幸恵<sup>#</sup> (東京都健康長寿医療センター)  
権藤恭之<sup>#</sup> (大阪大学大学院人間科学研究科)  
Jopp Daniela<sup>#</sup> (University of Lausanne、Institute of Psychology)

高齢者は若年者と比べ、ネガティブな情報よりもポジティブな情報に注意を向けることが知られている。本研究では長期縦断研究に参加する後期高齢者 678 名を対象に、情動スループ課題を実施した。その結果、ポジティブ単語の色命名はネガティブ単語やニュートラル単語の色命名よりも時間がかかること、認知機能や精神的健康が低下すると干渉量は増加することが示された。これらの知見に基づき、ポジティブイティ効果の生起機序について考察した。

PS13. 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自殺念慮との関連

稲垣(藤井)勉 (鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系)  
大浦真一 (甲南大学大学院人文科学研究科)  
松尾和弥 (甲南大学大学院人文科学研究科)  
島 義弘<sup>#</sup> (鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系)  
福井義一 (甲南大学文学部人間科学科)

本研究は 228 名の男女を対象に、顕在的・潜在的自尊心が自殺念慮に及ぼす影響を検討した。その結果、顕在的自尊心低群において、潜在的自尊心も低いほど、自殺念慮が高かった。さらに先行研究と同様、潜在的自尊心の方が顕在的自尊心に比して優位であり、顕在-潜在の不一致が大きいほど、自殺念慮が高かった。この結果は、本邦においても、自殺念慮に対して、顕在的自尊心のみならず潜在的自尊心も影響を及ぼすことを示すものである。

PS14. 東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響(8)

—地理的距離の違いと熊本地震の効果の検討—

木野和代 (宮城学院女子大学)  
大橋智樹<sup>#</sup> (宮城学院女子大学)  
松浦光和<sup>#</sup> (宮城学院女子大学)

東日本大震災は、被災地の人々にだけでなく、震災に関する報道を見聞きしたり、直接・間接的被害に遭遇した他地域の人々にも、大きな衝撃を与えたと考えられる。しかし、震災後 6 年経過し、時間と共に震災経験の風化を懸念する声もある。本研究では、青年期にある学生たちの価値観を 2012 年度末から毎年測定したデータについて、その価値観の変化の様相を、被災地からの地理的距離を考慮して分析した結果を報告する。

PS15. 対処行動による良性・悪性妬みの変化

浅川萌生（筑波大学大学院人間総合科学研究科(博士前期課程)心理専攻)

望月 聡（筑波大学人間系）

本研究では、良性妬み、悪性妬みをそれぞれ実験的に喚起させ（良性群、悪性群とする）、対処行動（努力）の有無を介して、状態良性妬みおよび状態悪性妬みがどのように変化するか検討した。実験の結果、状態良性妬みは良性群、悪性群ともに努力することで維持され、良性群が努力しないことで減少し、悪性群が努力しないことで増加するという結果が得られた。一方で状態悪性妬みは、いずれの群でも経時的に減少した。

PS16. 児童期における喜び・悲しみ・怒りに関する感情解釈能力の発達段階の推移

—小学3年生から6年生に関する検討—

本間優子（新潟青陵大学）

感情解釈能力とは「他者の内的状態である感情を推測する能力」と定義され、役割取得能力の下位要素であり（伊藤、1999）、学年が上がるほどその能力が向上する（e.g. 山田、2010; 中村、2006; 笹屋、1997）。感情解釈能力を役割取得能力の下位能力と捉えるのであれば、平均値ではなく発達段階という質的な検討を行う必要がある。本研究では喜び、悲しみ、怒りに関し、児童期における感情解釈能力の発達段階の推移について明らかにした。

PS17. 乳幼児感情表出写真に対するアレキシサイミア傾向者の表情認知特徴

—強制選択による感情語布置からの比較検討—

馬場天信（追手門学院大学心理学部）

アレキシサイミア傾向者が乳幼児の感情表出写真に対してどのような認知特徴を有するかについて検討することを目的とした。大学生197名を対象に乳幼児の情動表出写真30枚を提示し、覚醒次元、感情価次元、接近—回避次元でリッカート評定をさせ、最後に全表情写真に対して強制選択で基本感情語から最も当てはまると思われる感情を選択させた。MDSを用いてアレキシサイミア傾向者と非アレキシサイミア傾向者における表情認知の感情布置の特徴について検討を行った。

PS18. 高反すう者における効果的なストロープ干渉制御

西村春輝（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

望月 聡（筑波大学人間系）

不適応的な感情制御方略とされる反すうの増加は、実行機能の低下によって引き起こされると考えられている。しかしながら、むしろ高反すう者は実行機能が高いとする知見が近年では報告されてきている。本研究では、Stroop課題を用いて、高反すう者が干渉をより良く制御できるのかどうかを検討した。実験の結果、先行研究と一致し、高反すう者はStroop課題における正答率が高いことが示された。



PS19. 反すうの思考内容と気分状態の分類

大井 瞳 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

望月 聡 (筑波大学人間系)

精神疾患のリスクファクターである反すうは、落ち込みの状態や原因など様々な思考を含んでいるが、反すうの思考内容を検討した研究は乏しい。本研究では、反すうの思考内容と気分状態の分類および関連を検討することを目的とし、面接調査を行なった。結果より、思考内容に自己批判や後悔が含まれている場合にはネガティブな気分が持続するなど、反すうの思考内容ごとに思考前後の気分状態に違いが見られることが示唆された。

PS20. 職場の人間関係に基づいた若年層のレジリエンス向上策

戸梶亜紀彦 (東洋大学社会学部社会心理学科)

本研究は、一般的に職場で接する可能性のある関係性を提示し、その人間からの評価・承認の効果について検討した。さらに、職場の関係性の中でも最も影響力があると想定される上下関係(上司・先輩)を取り上げ、さまざまなタイプの特徴を設定してその効果の違いについて検討を行った。得られた結果から、全体として自身よりも職権を持つ上司や先輩の影響力の強いこと、また、雇用形態や性別によって違いのあることが示唆された。

PS21. 異文化間で汎用できる快適感概念の探索 —日本・米国・タイにおける調査—

門地(仙波)里絵 (花王株式会社感性科学研究所)

西野真知子<sup>#</sup> (花王株式会社感性科学研究所)

ある文化の中で経験される快さを異なる文化に属する人に提供した際、同じ感情反応と言語表出を引き起こすとは限らない。われわれは、日本・米国・タイの回答者を対象とし、複数の質の異なる快適感を説明する短文を提示し、その経験頻度と、短文間の類似性を評価させた。その結果、3地域に共通して経験頻度の高い快適感が存在し、文化差を超えて、7ないしは8種類のクラスターが抽出できる可能性を指摘した。

PS22. 協調的幸福感の文化比較 —コスタリカ・日本・オランダの比較—

一言英文 (福岡大学人文学科)

幸福感の意味づけには個人主義文化と集団主義文化の違いが存在する。先行研究では東アジアと北米の比較が主流であったが、本来この文化の次元は世界中の国々の間に存在する。本研究では、コスタリカ・日本・オランダの3カ国において計画的に抽出された社会人299名を対象に、協調的幸福感と全般的な幸福感を測定し、集団主義的な幸福の意味づけを測定していると考えられる前者の得点や相関が3カ国で系統的に異なるかを検討した。

PS23. 面子維持行為に関する日中比較 ―自己面子と他者面子の2次元をもとに―

林 萍萍 (神戸大学国際文化研究科)  
米谷 淳 (神戸大学大学教育推進機構)

自己面子と他者面子の2次元から日本人と中国人の面子維持行為を比較するために、日本人(118人)と中国人(133人)を対象に面子維持尺度53項目と相互独立・協調的自己観尺度20項目を用いて質問紙調査した。また、自己面子維持と他者面子維持に関わる行為を自由記述してもらった。分析の結果、面子維持尺度は因子構造が同じだが、項目の配置に違いが見られた。自由記述では共通の回答が得られた一方、文化に特有なものも得られた。

PS24. 中国人と日本人の感情認知における表情と声の相互干渉性

―表情刺激の判断難易度を高めた場合の検討―

曹 蓮 (東京学芸大学)  
杉森伸吉<sup>#</sup> (東京学芸大学)  
高 史明<sup>#</sup> (神奈川大学)

曹・杉森・高 (2017) は中国人と日本人の視聴覚感情認知における文化差を検討した。その結果、日本人は中国人より表情からの干渉が低く、声からの感情情報に敏感に反応することが分かった。一方、表情による感情認知に与える声からの干渉においては、中日間の違いは見られなかった。それは表情課題における正答率の天井効果による影響が考えられる。そこで本研究では表情刺激の判断難易度を高め、中日間の再検討を行う。

PS25. 虎穴に入らずんば虎子を得ず ―欺瞞的ユーモアによる自過失の不利益回避―

菊地史倫 (公益財団法人鉄道総合技術研究所)  
佐藤 拓 (いわき明星大学教養学部)

遅刻等の過失場面で、あまり起こらないことを理由に嘘をつく相手から強い疑いを持たれつつも遅刻を非難される等の不利益を回避できることが報告されている。本研究では、この生起確率が低い理由をおもしろく伝えることが不利益回避に与える影響を検討した。その結果、この欺瞞的ユーモアは聞き手に全く信じられていなかったが、自過失の不利益が大きい状況でも、相手がユーモアを認知すれば、不利益を回避できることが示された。

PS26. ストレスのユーモアコーピングと笑いに対する志向性

大久保純一郎 (帝塚山大学心理学部心理学科)  
西野弓月<sup>#</sup> (帝塚山大学大学院心理科学研究科)

大学生におけるユーモアコーピングと笑いに対する志向性や好みについて検討した。楯本・山崎 (2010) による対人ストレスユーモア対処尺度を用いた。また、「お笑い好きか」、「(対人場面で)積極的に笑いを取ろうとする方か」、「実際に笑いを取れる方か」というユーモア行動に関する問いに4件法で回答を求めた。さらに、自由記述として、「好きなお笑い芸人」を複数挙げるよう求めた。

- PS27. 女子大生の大学生活適応感とユーモアスタイル、不安、対人関係の関連  
吉津 潤 (関西大学)  
吉田昂平 (関西大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)  
雨宮俊彦 (関西大学社会学部)

大学生生活適応感を規定する要因として個人要因と環境要因が指摘されている。本研究では個人要因としてユーモアスタイル、不安を、環境要因として対人関係、大学施設等への満足度を取り上げた。大学生生活適応感と親和的ユーモア、自己高揚的ユーモアおよび対人関係満足度は正の関連を示し、自虐的ユーモア、不安は負の関連を示した。一方、大学生生活適応感と攻撃的ユーモアおよび大学施設等への満足度とは関連がみられなかった。

- PS28. 「憧れの人」に対する同一視および自己意識的感情と理想自己への志向性との関係  
橋本 巖 (愛媛大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻)  
高岡茉季<sup>#</sup> (株式会社愛媛 CATV)

本研究では、大学生が「憧れの人」として意識する人物の特徴やその人物への同一視の在り方と、自己意識的感情との関係性を分析し、さらに、それらが理想自己の志向性とどのようにつながるかを検討した。その結果、憧れの人が実在かメディア上か、またどのような関係性かによって自己意識的感情および同一視が異なること、そして、憧れの人の有無、同一視および自己意識的感情が理想自己の志向性と関連することが示された。

## 一般研究発表 ポスター発表 (2)

6月25日(日) 9:00~10:00 良心館102

- PS29. あなたの印象は1分で悪化する:既読後の時間経過が印象評価にあたえる影響  
福島法子 (メディエンスサービス株式会社)  
石井辰典 (東京成徳大学応用心理学部)  
関谷大輝 (東京成徳大学応用心理学部)

近年、LINEのやり取りを発端とする対人関係のトラブルが報告されている。著者らの予備調査によると、LINEで期待される「返信の早さ」という利便性が阻害された時、ネガティブ感情が生起し、それを相手に帰属する可能性が示唆された。そこでこの仮説を検証する実験研究を実施したところ、早い返信を期待できる状況においてのみ、返信の早い相手よりも遅い相手に対してより「感じが悪い」と評価がなされることが示された。

PS30. LINE コミュニケーションにおける顔文字使用に対人関係が及ぼす影響

山本恭子（神戸学院大学人文学部人間心理学科）

木村昌紀（神戸女学院大学人間科学部）

本研究では、初対面あるいは友人の2名1組でLINEによる会話を10分間行ってもらい、その間のテキスト、顔文字、スタンプ等の使用数を測定した。その結果、顔文字は友人群よりも初対面群において多く使用されていた。会話後に測定した透明性の錯覚は友人群の方が初対面群よりも高い傾向があった。友人群は会話相手に自分の気持ちが十分伝わっていると感じることで、感情情報を補足するための顔文字の使用量が少ないことが考えられる。

PS31. 人が涙を流すとき 一関連感情と気分変化一

白井真理子（同志社大学）

加藤樹里（金沢工業大学）

人は様々な場面で涙する。涙を流す場面や感情、そしてその時の気分変化に関してはそれぞれ調査結果が報告されているものの、体系的な関係性については明らかになっていない。本研究は、専門学校生・大学生159名を対象とし、感情的な涙に関する調査を行った結果、涙を流す場面は大きく7つに分類され、その背景にある感情は各場面によって異なることが示された。気分変化に関しては、場面間の違いは示されなかった。

PS32. 人が涙を流すとき(2) 一いつ、なぜ「泣きたい」と思い行動するのか一

加藤樹里（金沢工業大学心理情報学科）

白井真理子（同志社大学研究開発推進機構）

涙を流すことは一般的にネガティブなことと考えられる。しかし、人間は泣きたいと思うことがあるのだろうか。また泣きたいと思ったとき、どのような理由で、どのような行動を取るのだろうか。本研究では、泣きたいと思ったことがあるか、ある場合その時の行動や理由を専門学校生および大学生159名に調査した。その結果半数が泣きたいと思った経験があると回答し、すっきりする効果を求めて映画を観るという回答が多かった。

PS33. 幼児におけるネガティブではない涙の観察エピソードの収集

一保育士、幼稚園教諭を対象に一

和田由美子（九州ルーテル学院大学人文学部）

井崎美代<sup>#</sup>（九州ルーテル学院大学人文学部）

幼児のネガティブではない涙を直接観察した経験について、保育士、幼稚園教諭76名を対象に、質問紙への回答を求めた。その結果67%が幼児のネガティブではない涙の直接観察経験ありと回答し、合計83件のエピソードが集まった。ネガティブか否かの判定が難しいものが多かったが、「嬉しい」という言語報告とともに泣きが生じた事例が複数存在しており、ネガティブではない涙は幼児期から観察されることが明らかとなった。

PS34. ポジティブな自己一致具体的記憶の想起は気分改善に有効か？

—抑うつ症状による調整効果—

松本 昇（京都大学／日本学術振興会）

望月 聡（筑波大学人間系）

本研究ではポジティブな具体的記憶の想起が概括的記憶の想起よりも気分を改善させるか、ポジティブな非自己一致記憶がネガティブ気分を高めるかどうかを検討した。ネガティブ気分誘導後、参加者は具体的記憶想起群、概括的記憶想起群、気晴らし群に割り当てられ、それぞれの課題を行った。各群の気分改善効果に差はみられなかったが、抑うつ低群において具体的記憶想起を行った際に、想起された記憶の自己一致性が気分改善効果の高さと関連していた。

PS35. 情動的な自伝的記憶の想起特性について

—記憶経験質問紙 (Memory Experience Questionnaire) を用いた検討—

関口理久子（関西大学社会学部）

Sutin Angelina R.<sup>#</sup> (Florida State University, College of Medicine)

本研究では、記憶経験質問紙の日本語版（関口・Sutin、2016）により、肯定的又は否定的な感情が伴う自伝的記憶の主観的特性を検討した。大学生（N=117、平均 20.2 歳）に想起した自伝的記憶の主観的特性について評価を求めた。肯定的な記憶では、感覚的詳細さ、感情強度、時間的遠近感、他者との共有、感情価、鮮明さが、否定的な記憶では隔たり感が有意に高かった。一貫性、思い出し易さ、視点には有意差はなかった。

PS36. 能力 EI (ability Emotional Intelligence) テストにおける感情選択問題の回答に及ぼす感情感受性の影響

田中 敏（信州大学）

大石 超<sup>#</sup>（長野県屋代高等学校）

同一の物語に対してポジティブ感情 (P 感情) とネガティブ感情 (N 感情) の感受性が異なる 4 群を構成し、感情選択問題の回答の仕方を比較した結果、N 感情の感受性が高い群は低い群よりも恐怖感情の選択問題で有意に多く恐怖を選択したが、逆に、怒り感情の選択問題では怒りの選択に集中しないなどの結果が得られた。能力 EI は感情感受性を考慮し、少なくともポジティブ・ネガティブ感情別に測度化すべきことが示唆された。

PS37. 二字熟語を用いた情喚起語リストの作成

木村年晶（同志社大学研究開発推進機構）

鈴木直人（同志社大学心理学部）

本研究の目的は実験に用いるための標準化された情喚起語リストを作成することであった。大学生 38 名を対象に予備調査により選択された 271 語の二字熟語を PC モニター上に呈示して、アフェクトグリッドを用いて感情価と覚醒度の評価を求めた。分析の結果、感情価 (ネガティブ・ニュートラル・ポジティブ) × 覚醒度 (低・中・高) の 9 カテゴリーによる分類がなされ、最終的に 135 語の二字熟語による情喚起語が抽出された。

PS38. IAT を用いた潜在的衝動性の測定の試み

小橋真理子（立正大学大学院心理学研究科心理学専攻）

井田政則<sup>#</sup>（立正大学心理学部）

本研究では、衝動性に対する潜在的自己概念を測定するための IAT を作成することを目的とした。この衝動性 IAT では、概念カテゴリーとして「自己－他者」を、属性として「衝動的－自制的」を用いた。衝動的・自制的を表す刺激語は独自に作成した。この IAT で測定された潜在的衝動性と、衝動性関連尺度によって測定される顕在的衝動性および内省報告による衝動性との関連性を検討した。

PS39. 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが抑うつに及ぼす影響

—Single-Target Implicit Association Test を用いた検討—

大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）

松尾和弥（甲南大学大学院人文科学研究科）

藤井 勉（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系）

島 義弘<sup>#</sup>（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系）

福井義一（甲南大学文学部人間科学科）

本研究では愛着の内的作業モデル(IWM)の顕在・潜在面が抑うつに及ぼす影響を検討した。172名の男女に対し質問紙調査と実験を実施した。分析の結果、IWM の下位次元である見捨てられ不安と親密性の回避の顕在面が抑うつを高めるだけでなく、両者の潜在面が低い場合に最も抑うつが低かった。さらに、見捨てられ不安と親密性の回避それぞれの潜在面が顕在面に比べ優位であり、両側面の不一致が大きいほど抑うつが高いことが分かった。

PS40. 看護職の感情の制御と省察に関する研究

—Cross-sectional study on Emotion Regulation and Reflection of Clinical psychiatric nurses—

石井慎一郎（自治医科大学看護学部）

板橋直人<sup>#</sup>（日本保健医療大学保健医療学部）

路川達阿起<sup>#</sup>（自治医科大学看護学部）

佐藤貴紀<sup>#</sup>（自治医科大学看護学部）

本研究の目的は、看護職の感情の制御と省察との関係を明らかにすることである。対象者は、精神科病院の看護職 126 名であり、日本版 ESCQ (情動の制御と調節: MR) 及び省察に関する質問紙調査を行った。MR 平均得点をもとに低群 (n=54) と高群 (n=72) の2群に分け、分析した結果、高群の省察は低群よりも 12 項目中 9 項目において有意に高かった (t 検定)。また、MR と省察には有意な正の相関が認められた。

PS41. 感情制御が主観的感情状態に及ぼす影響の経験サンプリング法によるインターネット調査

平井 花（学習院大学文学部心理学科）

本調査では、Gross & John (2003) の提起した感情制御方略(再評価・抑制)が、喜び・悲しみ・怒りの主観的感情状態にどのような影響を与えているかについて調査を実施した。大学生 131 名(男性 23 名、女性 108 名、M = 19.99 歳)が調査に参加し、質問紙およびインターネット上のアンケートに回答した。結果、感情制御方略は感情ごと、また回答時期ごとに、感情状態に与える影響が異なることが示唆された。

PS42. 定位反応誘発状況下の心身反応の推移

小川時洋（科学警察研究所法科学第四部情報科学第一研究室）

定位反応は、重要な刺激や環境の変化に対して起こる複合反応である。しかし、感情との関連については検討が少ない。本研究では、隠匿情報検査(CIT)と純音刺激を用いた反復-変化課題という2種類の定位反応誘発課題において、皮膚電気活動、心拍数、規準化脈波容積の自律系生理活動と、各刺激提示時点における覚醒水準および驚き評定を測定した。課題ごとに、これらの心身の反応の刺激変化の前後にわたる推移を分析した。

PS43. 内受容感覚の鋭敏さを測定する課題に関する検討

櫻井優太（愛知淑徳大学心理学部）

清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）

自身の生理的状态に関する感覚(内受容感覚)の鋭敏さには個人差がある。内受容感覚と感情の関連性が検討されているが、内受容感覚は複数の測定法があり、各研究で用いられている方法は異なる。そこで本研究では、外的手がかり無しに心拍数を数える課題、呈示された音声于心拍と同時に鳴っているか遅れて鳴っているか判断する課題、質問紙による内受容感覚の自己評価それぞれの間の相関を求め、内受容感覚測定法について検討した。

PS44. 悲しみ想起後のフォーカシング技法を用いた音楽聴取がもたらす心理・生理的反応②

— 教示の有無と歌詞の内容の違いによる検討 —

栗野理恵子（愛知淑徳大学心理学部）

清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）

栗野・清水(2016)に続き、悲しみ想起後におけるフォーカシング技法を用いた音楽聴取の教示が心理・生理的反応に及ぼす影響について検討した。本研究では、フォーカシング指向の教示(教示あり条件)、心電図の説明(教示なし条件)を用いてフォーカシング的態度形成の教示の有無の比較を行った。また聴取した音楽の歌詞の内容(前向き、悲しみ)を要因に加え分析を行った。その結果、心理・生理両指標に幾つか有意な効果が認められた。

PS45. 発表場面における「あがり」— 唾液中コルチゾールと感情の変化の検討 —

慶野友祐（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

「あがり」という現象を多角的に理解するための第一歩として、研究発表場面における唾液中コルチゾール濃度、感情経験・あがりの程度を測定した。測定タイミングは、発表前・発表後・発表1時間後の計3回であり、発表の無い別の日の同一時刻にも同様の測定を行った。参加者は前もって、自己意識・対人不安傾向・熟慮性などの特性質問紙に回答した。あがりの状態とその他の指標の関連性を検討する。

- PS46. 身体的清潔さ、敏感さ、高揚感と心理的態度との関係  
—とくにモラルジレンマにおける意思決定に関して—

上原智香子（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）

本研究は、身体的清潔さ（手を拭く行動）、敏感さ（HSP 傾向）、高揚感（くじの当落）、日常的情報接触行動（SNS 利用傾向）など思考態度、モラルジレンマにおける意思決定など心理的態度にはどのような関係があるのか、実験心理学的手法により静岡・沖縄の中学生約 900 人を対象にアンケート調査を行った結果の報告となります。

- PS47. 意図した姿勢が対人印象に及ぼす影響

北村美穂（早稲田大学）

渡邊克巳<sup>#</sup>（早稲田大学）

姿勢は対人印象に影響を与える。そのため普段我々は、姿勢を変えて、相手に与える印象を良くしようと試みる。本研究では、こうした意図がどの程度効果的に働くのかを知るために、「良い・悪い」姿勢を意図した場合に、魅力、信頼性、支配性の印象がどのように変わるかを調べた。その結果、撮影角度にかかわらず「良い」姿勢は魅力と信頼性を向上させ、特に側面から見た場合に印象変化が大きいことがわかった。

- PS48. 意味飽和が感情認識に及ぼす影響

池田慎之介（東京大学）

感情語を繰り返し読み上げることで、表情写真からの感情認識に遅れが生じることが示されている（Barrett et al., 2007）。本研究では、表情写真の他、表情イラスト、感情音声、そして感情音楽からの感情認識においても、同様に意味飽和による遅れが生じるか検討した。その結果、表情イラストのみ意味飽和の影響が見られず、感情音声及び感情音楽には影響が見られた。参照する手がかりによって感情語の用いられ方が異なる可能性が示唆された。

- PS49. オノマトペと画像の情報統合に基づいた視覚的嫌悪感の形成

薛玉テイ（九州大学大学院人間環境学府）

郷原皓彦<sup>#</sup>（九州大学大学院人間環境学府・日本学術振興会特別研究員）

佐々木恭志郎（早稲田大学理工学術院・日本学術振興会特別研究員）

山田祐樹（九州大学基幹教育院）

粘性オノマトペは、同時に呈示される素材の視覚的な嫌悪感を変調する。本研究はこの変調の感情処理機序を検討した。実験の結果、粘性オノマトペと素材画像の呈示タイミングを 1 秒程度ずらしても、視覚的嫌悪感を変調された。また、この変調にはオノマトペの音韻情報や形態情報が関与しないことも示された。これはある時間窓で入力されるオノマトペの粘性イメージ情報の統合に基づいて視覚的嫌悪感が形成される内的機序を示唆する。



PS50. 信頼性学習による顔の見えの変化

鈴木敦命（名古屋大学情報学研究所）

人間は他人に協力されたり、裏切られたりすると、それに応じて、その人の信頼性の評価を上下させる。本研究では、そうした信頼性学習に伴う“顔の見え”の変化を検討した。結果として、投資を模したゲームで参加者を裏切る人物の顔は協力する人物の顔よりも目が細く見えるようになることが明らかになった。つまり、信頼できない顔のステレオタイプ的特徴である“細い目”の知覚が不信感の学習によって強まることが示唆された。

PS51. 認知課題を用いたスピーチ不安の低減 —社会不安傾向との関連—

飯田沙依亜（愛知工業大学）

飯田ら(2009)は認知課題の遂行が後続の感情反応を低減させることを示した。本研究では彼らの知見の応用可能性について検討するため、スピーチ不安の低減が、スピーチを苦手とする社会不安傾向の高い実験参加者においても確認できるかを検討した。結果、社会不安傾向が高い実験参加者においても同様の現象は確認されたが、同時に個人差も確認され、安定した効果を得るためにはより詳細な検討が必要といえる。

PS52. 集合体による不快感 —空間周波数成分と集合体恐怖特性からの検討—

佐々木恭志郎（早稲田大学理工学術院・九州大学基幹教育院・日本学術振興会特別研究員）

山田祐樹（九州大学基幹教育院）

黒木大一郎<sup>#</sup>（九州大学文学部）

三浦佳世<sup>#</sup>（九州大学大学院人間環境学研究院）

蓮の花托などの円形物体の集合は不快感を喚起する。本研究では、空間周波数成分と集合体恐怖特性の個人差に着目し、どの帯域の成分が不快感に寄与しているかを検討した。結果として、集合体恐怖特性が高い人は、低い人に比べて、元画像、低域成分だけの画像、中域成分だけの画像から強い不快感を感じた。ゆえに、集合体による不快感は低域および中域の空間周波数処理と集合体恐怖特性との相互作用に由来することが示唆される。

PS53. トライポフォビアが不快に感じる視覚刺激は本当に不快感情を喚起しているのか

川口めぐみ（駒澤学園駒沢女子短期大学）

トライポフォビアという恐怖症がある。トライポフォビアは DSM-V では認められていないが、円形が多数配置された視覚刺激を見ると鳥肌や不快感情が喚起されるという。この刺激に対する反応はトライポフォビア者のみならず健常者も同様の傾向を示すことがわかっている(Cole & Wilkins, 2013)。一見、規則的で対称的な審美性の高い刺激に見えるが、喚起されている感情は本当に不快感情なのか、閾下プライミングの手続きを用いて検討を行った。

PS54. 新奇な果実はよく知る果実臭で好物化

米満文哉（九州大学大学院人間環境学府）

佐々木恭志郎（早稲田大学基幹理工学部表現工学科・九州大学基幹教育院・日本学術振興会特別研究員（SPD））

山田祐樹（九州大学基幹教育院）

既知のカテゴリに分類しにくい見た目を持つ果実への好意度は低下するが、既知の果実の匂いを呈示すると改善される。本研究は対象の見た目と匂いのカテゴリの一致性がこの現象に関わるのかを検討した。リンゴ、ミント、無臭の匂い条件で、トマトとイチゴの合成画像を用いた実験の結果、リンゴの匂いが果実への好意度を高めたことから、視嗅覚的カテゴリー一致性が分類困難な果実の好意度の形成機序に関与することが示唆された。

PS55. 赤色は名前をも魅力的にするか？

服部陽介（京都学園大学人文学部）

赤色は人物の魅力度を高めることが報告されており、本邦での同様の効果が確認されている（服部、2016）。本研究では、人物名の背景色を変更し、色が人物の魅力度に与える影響について検討を行った。その結果、女性の名前の背景色が赤色である場合は、白色である場合よりも、名前的人物が魅力的であると評価された。男性の名前である場合には、このような効果は確認されなかった。赤色が魅力度に及ぼす影響の範囲について議論する。

PS56. ジェンダー環境によって異性の好みが変わる —女子大学と共学大学の比較—

中 響子（九州大学大学院人間環境学府）

米満文哉（九州大学大学院人間環境学府）

山田祐樹（九州大学基幹教育院）

本研究では、女子大学と共学大学に通う女性を対象にジェンダー環境が顔の魅力判断に影響するかを検討した。実験参加者は、対呈示された男性的な顔と女性的な顔のどちらの顔がより魅力的かを選択した。その結果、女子大学の学生は共学大学の学生より女性的な顔を魅力的とした選択の割合が有意に高かった。単一のジェンダー環境における女性顔への順応によって、より平均的な顔に対する選好を誘発したことが示唆される。

# 北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

## 生理心理学と精神生理学 全3巻<sup>(仮題)</sup>

—2017年春から順次刊行予定！— 堀 忠雄・尾崎久記監修 B5・約320頁・予価4000円＋税 I巻は歴史的な経緯も含め、主に研究法の基礎的内容を扱う。第II巻は感情・情動、認知などの応用領域の成果や測定技術・解析の仕方について詳述。第III巻はワーキングメモリ、デフォルトモードネットワークなどを中心に、脳科学における最新の成果を紹介。

## 心理学ベーシックなるほど！心理学研究法<sup>(仮題)</sup> 全5巻 1巻

—2017年春から順次刊行！— 三浦麻子監修 三浦麻子著 A5・約200頁・予価2200円＋税 今後を担う若き研究者育成の礎となる研究法シリーズ全5巻。本巻では、「研究する」ということ、「心」を「測定する」ということ、「研究を“公表する”ということ」と題した3部構成で、今後の研究発展を牽引する基礎力を育み、心がけるべきルールを解説。

## 心の中のブラインド・スポット

—善良な人々に潜む非意識のバイアス— M. R. バナージ・A. G. グリーンワルド著 北村英哉・小林知博訳 四六・368頁・本体2700円＋税 「非意識」研究の知見により、公正でありたいと思う人の心にも、誤りや歪みがあることが分かってきた。心に潜むバイアスや潜在的態度を測る注目のテストIATにも言及。下條信輔氏推薦！

## 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション

杉山 崇・越智啓太・丹藤克也編著 A5・272頁・本体3200円＋税 記憶研究の知見は、心理臨床の実践にどのように役立つのか。また、臨床現場の知見は、記憶の機能・メカニズムにどのような新たな光を当てるのか。本書では、心理学の基礎研究の中でも、とりわけ近年の記憶研究の成果を通して心理臨床の取り組みを検討する。

## シリーズ 心理学と仕事2 神経・生理心理学

—2017年刊行予定！— 太田信夫監修 片山順一編集 A5・約200頁・予価2300円＋税 心理学を活かした仕事をを目指す学生や教育関係者に向けて、多彩な心理学ワールドを紹介。実際に働く人々の「現場の声」も交えながら、シリーズ総勢300名以上の執筆陣が、心理学の今を伝える。本巻では、特別支援やポリグラフ検査など教育・産業での応用にふれる。

## 感性認知

—アイステアシスの心理学— 三浦佳世編著 A5・228頁・本体3400円＋税 感性のさまざまな現れを、知覚心理学あるいは認知心理学の立場から、実証的データに基づき検討。感性とは何かについても考察。日常生活においてなじみ深い事象や人間の生活を豊かにしてくれる感性表現を通して、人間の知覚や評価の基盤を探る。

## ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動

—その予防と改善の可能性— 吉澤寛之・大西彩子・G. ジニ・吉田俊和編著 A5・280頁・本体3000円＋税 攻撃行動、いじめ、少年非行など反社会的行動を行う者の「認知のゆがみ」に焦点を当てる。社会・教育・発達といった心理学領域に脳科学も含めて、先行研究を網羅的に概観。修正と予防の手掛かりとなる国内外の実践研究も紹介。

## ふと浮かぶ記憶と思考の心理学

—無意図的な心的活動の基礎と臨床— 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里編著 A5・248頁・本体3000円＋税 無意図的想起やマインドワンダリング、洞察問題解決、思考抑制の皮肉過程、反すう、侵入想起など、自らの意志と無関係に意識に上る無意図的な心の働きにいち早く注目し、主に認知・臨床心理学から果敢に挑む。

### 改訂エンスaikロペディア 心理学研究方法論

W. J. レイ著／岡田圭二編訳 本体5000円＋税

### 心理学基礎実習マニュアル

宮谷真人・坂田省吾代表編集 本体2800円＋税

### 心理学教育のための傑作工夫集

L. T. ベンジャミン・ジュニア編／中澤 潤他監訳 本体2800円＋税

### わかって楽しい心理統計法入門 Ver.2

松田文子・三宅幹子・橋本優花里著 本体2500円＋税

### 増補改訂 SPSSのススメ1

竹原卓真著 本体3200円＋税

### 改訂新版 初めての心理学英語論文

D. シュワープ・B. シュワープ・高橋雅治著 本体1900円＋税

### 現代の認知心理学1 知覚と感性

日本認知心理学会監修／三浦佳世編 本体3600円＋税

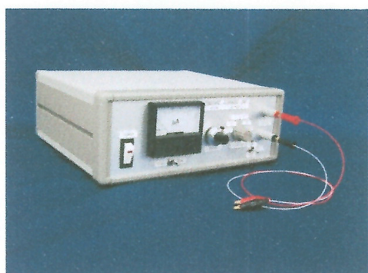
### 現代の認知心理学2 記憶と日常

日本認知心理学会監修／太田信夫・蔵島行雄編 本体3600円＋税

### 現代の認知心理学3 思考と言語

日本認知心理学会監修／梶見 孝編 本体3600円＋税

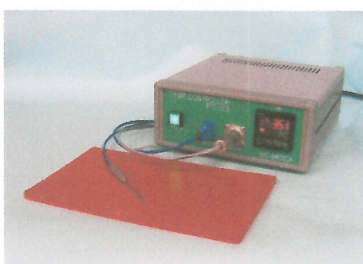
\* 微小定電流装置 BCC-3621 ¥170,000 税別



50  $\mu$ Aまでの電流を流せる微小定電流装置

- ・出力電流(定電流) 0~50  $\mu$ A
- ・最大不可 5M $\Omega$

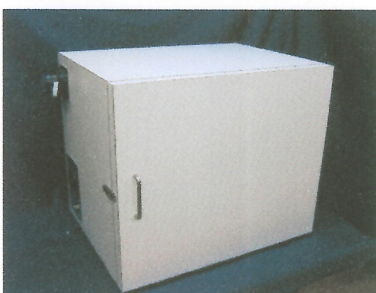
\* 体温コントローラ BTC-102 ¥210,000 税別



小動物用体温保持装置

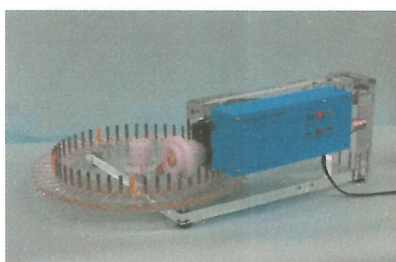
- ・温度設定 室温~50 $^{\circ}$ C
- ・ヒーター 250 $\times$ 150 mm

\* 防音箱 ¥230,000 税別 ~



- ・内寸 500 $\times$ 500 $\times$ 500 mm
  - ・吸音材、コネクションパネル、換気ファン 付き
- 御希望サイズの防音箱を製作致します

\* ユニバーサルフィーダ BUF-310-P50 ¥300,000 税別



サルの報酬装置

- ・餌ポケット数 50個
- ・餌ポケットサイズ 10 $\times$ 60 mm 深さ9mm
- ・制御入力信号 オープンコレクター接点

株式会社 バイオ・メディカ  
〒550-0003  
大阪市西区京町堀2丁目2-10  
TEL 06-6443-9666  
FAX 06-6443-3491  
E-mail info@bio-medica.co.jp  
http://www.bio-medica.co.jp/

# ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111  
FAX 075-723-0095

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15  
http://www.nakanishiya.co.jp/ (表示は税抜価格)

## 心理学概論(第2版)

岡市廣成・鈴木直人 監修  
必ずおさえるべき内容を授業の解説なくとも理解できるように、さらに分りやすく解説。学生のための必修スタンダード教科書 渾身の改訂版。 3,200円

## 感情研究の新展開

北村英哉・木村晴編  
主要理論や研究方法をおさえ、記憶・判断・自己など新たな視点を展開。さらに臨床場面における応用的トピックまで幅広く解説した、基礎的専門書。 2,800円

## ポジティブ心理学

◎21世紀の心理学の可能性  
島井哲志 編  
幸福感と人間関係、サクセスフルエイジングなどポジティブ心理学の最新の研究成果。 3,000円

## 保健と健康の心理学

◎ポジティブヘルスの実現  
大竹恵子 編著/島井哲志 監修  
心身の健康と充実した人生、幸福を目指す新しい健康心理学概論。 3,400円

## 幸福感を紡ぐ 人間関係と教育

子安増生・杉本均 編  
プータンでのフィールドワークなどから、幸福感を支える「教育の力」を示す。 2,200円

## クロスロード・パーソナリティ・シリーズ③ 心理学

新しい統計手法を駆使してパーソナリティ研究に挑む人たちに向け、幅広くモデルを紹介。 3,800円

## 心の科学(第2版)

◎理論から現実社会へ  
兵藤宗吉・緑川晶 編  
神経感覚・知覚・認知心理学などの基礎から臨床・社会心理学などの応用までしっかり解説した好評入門書。 2,400円

## コンピテンス

◎個人の発達とよりよい社会形成のために  
速水敏彦 監修  
陳惠貞・浦上昌則・高村和代・中谷素之 編  
動機づけや適応力など、社会で生きる能力に迫る多彩な論文集。 2,800円

## ポジティブ心理学再考

尾崎真奈美 編  
傷ついた心の回復のために――東日本大震災の語りをはじめ、苦しみからの成長に向き合う第二のポジティブ心理学運動の全容を解説する。 2,200円

## 保健と健康の心理学 標準テキスト② 保健医療・福祉領域で働く 心理職のための法律と倫理

関連する法律や倫理を具体的に解説  
山崎久美子・津田彰・島井哲志 編著  
島井哲志 監修 3,200円

## 幸福を目指す 対人社会心理学

◎対人コミュニケーションと対人関係の科学  
大坊郁夫 編  
人間関係で悩まない、皆が幸せな社会へ、社会心理学の視点から提言。 3,000円

## 社会心理学概論

北村英哉・内田由紀子 編  
古典的知見から進化・脳科学など最新の研究まで、網羅的に解説。社会心理学の全貌を学び、日進月歩の研究の道標となる、オープンな決定版。 3,500円

### 4月新刊

## 食行動の科学 ―「食べる」を読みとく― (食と味嗅覚の人間科学)

今田純雄・和田有史 編  
A5判 244頁 本体 4,200円 (10667-1)

食行動科学の基礎から生涯発達、予防医学や消費者行動予測等の応用までを取り上げる。

[内容] 食と知覚/社会的認知/高齢者の食/欲求と食行動/生物性と文化性/官能評価/栄養教育/ビッグデータ



## 心理学実験プログラミング

―Python/Psychopyによる実験作成・データ処理―  
(実践 Python ライブラリー) **新シリーズ**

十河宏行 著  
A5判 192頁 本体 3,000円 (12891-8)

Python (Psy-choPy) で心理学実験の作成やデータ処理を実践。コツやノウハウも紹介。

[内容] 準備(プログラミングの基礎など)/実験の作成(刺激の作成、計測)/データ処理(整理、音声、画像)/付録(セットアップ、機器制御)

現代社会がかかえる深刻な課題に取り組む諸科学を解説。

## 情動学シリーズ(全10巻)

【既刊一覧】(8点、各A5判)

- ① 情動の進化 ―動物から人間へ―  
渡辺茂・菊水健史 編 本体 3,200円 (12891-8)
- ② 情動の仕組みとその異常  
山脇成人・西条寿夫編 本体 3,700円 (10692-3)
- ③ 情動と発達・教育―子どもの成長環境―  
伊藤良子・津田正明編 本体 3,200円 (10693-0)
- ④ 情動と意思決定―感情と理性の統合―  
渡邊正孝・船橋新太郎編 本体 3,400円 (10694-7)
- ⑤ 情動と運動―スポーツとこころ―  
西野仁雄・中込四郎 編 本体 3,700円 (10695-4)
- ⑥ 情動と呼吸―自律系と呼吸法―  
本間生夫・帯津良一 編 本体 3,000円 (10696-1)
- ⑦ 情動と食―適切な食育のあり方―  
二宮くみ子・谷和樹編 本体 4,200円 (10697-8)
- ⑧ 情動とトラウマ  
―制御の仕組みと治療・対応―  
奥山真紀子・三村将編 本体 3,700円 (10698-5)

【近刊】

- ⑨ 情動と犯罪 福井裕輝・岡田尊司編



**朝倉書店**

〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29  
電話 営業部 (03) 3260-7631 FAX (03) 3260-0180  
http://www.asakura.co.jp

(ISBN) は 978-4-254- を省略  
価格は税抜本体





## 日本感情心理学会第 25 回年次学術大会

### 賛助団体芳名（協賛・広告・展示）

株式会社 朝倉書店  
株式会社 北大路書房  
株式会社 ナカニシヤ出版  
株式会社 バイオ・メディカ  
株式会社 有斐閣  
サクセス・ベル株式会社  
同志社心理学会  
楽天リサーチ株式会社

（五十音順）

本大会を開催するにあたり、上記企業各位や団体より多大なご支援をいただきました。ここに  
そのご芳名を記して、心から感謝の意を表します。

2017 年 5 月

日本感情心理学会第 25 回年次学術大会準備委員会 委員長  
鈴木直人

### 大会準備委員会

委員長:鈴木直人（同志社大学）  
副委員長:内山伊知郎（同志社大学）  
事務局長:竹原卓真（同志社大学）  
興津真理子（同志社大学）  
大会委員:伴 碧（同志社大学）  
木村年晶（同志社大学）  
中川紗江（同志社大学）  
白井真理子（同志社大学）  
朱映カン（同志社大学[大学院生]）  
荒井穂菜美（同志社大学[大学院生]）

〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷 1-3  
同志社大学心理学部

E-mail: [jsre2017@mail.doshisha.ac.jp](mailto:jsre2017@mail.doshisha.ac.jp)

HP: <http://jsre.wdc-jp.com/conf/2017/index.html>